

「内田祥三談話速記録」(六)

聞き手・村松貞次郎

ここに紹介するのは、昭和四十三年二月十七日から十一月一日にかけて、全十六回にわたって行われた内田祥三の談話の書き起こしである。内田祥三は、大正から昭和にかけて東京帝国大学教授を務め、建築・都市行政において大きな影響力を持った人である。また建築家としても多くの作品を残し、東京大学内では関東大震災以後のキャンパス復興の責任者であった。後に第十四代総長を務め、戦時下の困難な時期に大学行政の任にあたった。

『内田祥三先生作品集』（非売品、昭和四十四年十一月三十日発行、内田祥三先生祝賀記念作品集刊行会編集、鹿島研究所出版会発行）の「あとがき」によれば、出版部会は、「四十三年の一月から数十回先生のご自宅にて委員が長時間に亘り」打ち合せをした、という。従って、談話はその打ち合せの一部ということになる。実際、作品集を読むと、談話と同じ文章、内容が少なからず含まれていて、談話が作品集を編纂するために企画されたことが判る。聞き手は故村松貞次郎東京大学名誉教授（当時、生産技術研究所助教授）

である。

底本は、大学史料室所蔵の「内田祥三先生談話」と題されたフアイルを用いた。鉛筆書きのものをゼロックスコピーして綴じたものである。

今回は座談の第十一回（昭和四十三年五月二十五日）、第十二回（同六月五日）を収録する。

凡例

1. 原文は、談話の録音テープから書き起こされたものであり、誤字・脱字などが散見されるので、最小限の訂正を加えた。句読点も最小限の訂正を加えた。
2. 人名は、判明する限りにおいて氏名を調べ、（ ）で補ったが、不明のものは仮名のままにしておいた。建築名も、原名称、建設年を（ ）で補った。また書き起こしのなかの？マークも、不明なものはそのままのこし、（？）マークで示した。

○第十一回（内田先生訪問、五月二十五日午後一時。）

村松 このクロムストはおもしろいですね。

内田 クロムストは佐野（利器）さんがむこうに留学中に講義を聞いた人です。それで佐野さんが呼んだわけです。

村松 タルボットは鉄筋コンクリートの…。

内田 タルボットは鉄筋コンクリートです。これはぼくら意外に驚いたのですがあの人は鉄筋コンクリートの先生だとばかり思っていたのですが、そうしたら先生には違くないが講座はサニタリ・エンジニアリング、上下水道です。だから大学教授は研究は自由なもので、あの人が有名なのは鉄筋コンクリートの実物実験ですからね。しかし本職は上下水道です。そのときも七十を越えていたと思つています。あの写真を写して貰つて大学にはないかもしれないが…。

村松 その次にタウト夫妻が東大に…。

内田 タウト夫妻はぼくが呼んでごちそうをしたので。

村松 久米権九郎さんが…。

——久米さんが御世話されたのですね。

村松 タウトが東大に来たというのは記録で知っていますね。あれは八年に来たわけですから。

内田 それから日本がばかに気に入つてずつといるのです。あれはエジプトか、どこかで死んだのですね。

村松 トルコです。大統領のケマル・パシヤに招待されてトルコである程度仕事はしたようです。都市計画などは…。

内田 そうですね。都市計画のことをやっていますね。ヨーロッパやアメリカでは建築の中に都市計画が入っているようなものですね。だから日本と違うのですね。

——？

村松 高山先生はお元気になられたのですか。

内田 すつかりよくなりましたね。

村松 それを知ったのは戦前の高等建築学大系ですか。あれの鉄筋コンクリート編の序章のところにちよつと紹介されていますね。

——建物自体に。

村松 コンドル先生も何か書かれたもので得意なのはあれは鉄筋コンクリート以前ですし？何かをやられたときにコンクリートの土間の？それで今日はこの間建築法規関係のお話しを古いのからお伺いしまして、先生の都市計画の講義内容を伺いまして、用途地域制の考え方、それに学会に常置委員会をつくられたというお話し、それから原総理がなかなか判こを押してくれないで、総理の引き出しの中におかれていたというお話し、そういうところまでお話しを伺いまして、きょうは都市計画の図面がそろわないのですが、先生のやられた団地計画のお話しをお伺いする予定になっております。大同とか、日立の工業都市…。

内田 大同のだいたいことは「建築雑誌」に書いてあると思つていたが…。

村松 「現代建築」という工作文化連盟の？あまり詳しいのは書いていないのですが。

内田 「建築雑誌」ではなかったかな。あの時分に日本の都市計画法、いわゆる市街地建築物法ができておりましたから、それを参考にしてほぼそれと似たようなものだと思いますが、つくったのです。その法規関係のこともありました。

内田 その当時一般から注目されていろいろなところから原稿を求められるのです。それで簡単に書いて出したのですが。

村松 そういうのは国内ではちょっとできないような大規模な都市計画が日本の近代建築の中でそういうことで注目されたのですかね。内地ではあれだけの大規模なものとは不可能なわけですね。

内田 都市全体を取り扱ったというようなことではないですね。むこうには新京の都市計画が相当雄大なものでしたが、あれはもとあるものなどに拘束を受けてやっておるから、新京の都市計画は東京あたりの都市計画とかなり似ているようなもので、大同のは新たに内蒙古のほうに三つかたまりができたのです。そのうちの一つに晋北自治政府というのができ、その最高首脳者から頼まれました、自由な計画をやってみてほしいということで、そういうのを頼まれるのはなかなか厄介でして、日本政府の許可があるわけです。そして日本の官吏が外国から旅費をもらって旅行をする、つまり手当を支給されるものですから問題があるのだが、いろいろ問答があつて陸軍省などにたびたび出されたのですが、それでやつと話がついて出かけて行ったのです。そして非常に都合がよかつたのは、途中北京に寄つたのです。北京から入つてゆくのが一番道がいいと

いうことです。それから行つたところが北京にやはり一つの政府ができておりまして、日本の傀儡政権みたいなものです。日本のほうでいろいろ世話をやいている政権があつて、その首脳者がその人が日本に留学していたころ陸軍の經理学校でよくが三年間教えた人です。それをちつとも知らないで行つたのです。そして汽車の中にこういう人が先生を出迎えにこられることになってからというのです。一体その人はどういう人かと聞いたら、北京政府の最高の責任者でとても偉い人だめつたに会える人ではないという話で、それで行つたら来ているのです。非常に有名な人です。いろいろむこうの要人を紹介してくれたりして非常に便宜をはかつてくれた人です。それでごく新規なものをやろうというつもりで高山（英華）君と関野（克）君、ぼくの長男の祥文の三人を連れて行つたのです。二、三日かかって周囲の状況などをみて（テープ替え）たくさんだという話もあるんだけど、しかし実物をぼくは見えてきたのですが石碑のようなもので、そこに雲崗の石仏の入り口のところにいわれを書いたものがあるのです。そのいわれにこの石仏は北魏の時代のもので、非常に古いもので、芸術的な価値の非常に高いもので、そういう高い宝を持つていながら長いこと我々に現れなかつた。人が知らなかつた。

ところが、日本、伊東忠太これを発見するというのがあるのです。それから非常に有名になつたというのです。こういうところに碑を建てさせるような発見をされたというのはいたいしたものだと思いますが、それは雲崗の旅行記がごく簡単なのがありまして、それを

よく読んでみたのですが、雲岡のことはわずかしか書いていないので、本当に発見しただけで詳しくは伊東先生は調べられなかったようです。ただ交通など非常に不便でロバみたいな小さな馬に乗って人夫を雇って荷物を持たして、むこうは旅行をするときには寝具から何から持ってゆきますから、それを持ってテクテクと行ったのがどういう気持ちであつたらうかというのが非常に感慨深く、帰ってきて伊東先生にそういう話をしたのですが。

それとぼくはかねがねこういう疑問を持つてゐるのです。芸術に對して、何だか芸術は古いものほどいいという觀念が非常に強いのです。建築などのことにそうで、伊東先生も関野（貞）先生もこれは古いからいい。それを突っ込んで聞いてみても古さがいいというのではなくて芸術的価値が高いという話を聞いてゐるのですが、ぼくはそれのように考えてゆくと芸術というのは何を聞いてみても古いものほどいいということばかりで、新しくていいというのは、徳川時代はもう芸術の下落で、明治時代にくればなお甚だしいという。そうなるも自然科学は年月がたつにしたがつて、だんだんと進化してゆくものだから、芸術はそれとは逆に新しいほど悪いということになる、新しくなるほど墮落してゆくということ、そうすると芸術に進歩なしという結論をしなければならぬことになるが、それはどういふわけだろうかという疑問を持つて関野先生や伊東先生に伺つたこともあつたのです。やはりどうもはつきりした答えはなく、よかつたからいいのだということだつたのですが、すいぶんいろいろな人に聞いてみて、理科のほうの先生で芸術など興味を持つてい

ろいろ調べておられる中村清二先生に「どうもこういうことから考えてゆくと自然科学には進歩はあるが芸術は進歩がなくて退歩があるというだけのように思うのですがどうでしょうか」と聞くと「いや、そんなことは徹底的にあり得ないことだ。それはいいものもあるし悪いものもあるだろうけれども、いいものが比較的よけいに残つてゐることにすぎないのじゃないだろうか」ということなんです。どうも批評などを聞いたり、本を読んでみると、どうもおかしいと思つてゐたのです。それで行つてみましたら一面にたいへんな数の石仏があるのです。それで非常に大きなものから小さいものもいろいろあるのですが、一番先に驚いたのは、こんなところからきてこういう芸術が日本に伝わつてゆくのかと思つてゐたのです。

それはまさに同じ系統のものと誰が見てもいわざるを得ないようなもの、それが一つと、非常にいいものとなつまらないものがあるのです。日本にきているような、法隆寺にあるようなものより、これは同じ系統には違ひないが、たしかに数等勝つてゐると思われれるものが相当数多くあります。それと同時にここに並んでゐるからいいのかもしれないが、一つ取り出してみたらつまらないと思つのもある。

古いからいいというわけではなくて、やはりいいものも悪いものもあるのです。それであるいはいいものが自然と残つてゐるのか、大同の石仏のようなのは全体的によく保存されてゐるほうですから、あまり悪いものでも、なくなつてしまわないで残つてゐたのだからという気がするのです。

村松　　そういう疑問をお持ちになっても確かめられるところはなかなか偉いというか、法隆寺の壁画をいま朝日新聞が主になって再現をやっていますが、あれなど関係した絵描きさんなどに言わせると、同じ壁画でもうまいのとへたなのがあるらしいですね。そういうのはやはりあるのでしょうか。

内田　　今度できたのはなるべく一流の人ばかりをそろえているのですが、それでもうまい、拙いはあるに違いないのです。われわれが見てもわからない程度の拙さかもしれないが。

村松　　昔のものと絵にうまい、拙いがあると同時に今度やった連中にもあるんですね。それと解釈の差もあると思うのです。絵の見方、その絵描きさんの考え方の差があると思うのです。

内田　　ずっと昔の話ですが、だんだん建物が傷んできて、もしちよつとした地震でもあつたら金堂は崩れてしまうかもしれない。そういうのが地震学者の今村明恒さんあたりから話ができて、そんなことになつたらたいへんだということで、あれを何とか復元できないものなら復元するし、復元できないものならばありのままの形で保存することにしたという意見が学者の仲間にてきたわけです。

芸術家のほうでは、あれをほとんど神様のように思っているのですから、ああいうものに手を触れるのはもつてのほかだ。断じてあのままにして保存しなければならぬという意見があるのです。それで法隆寺壁画保存委員会という国の委員会ができたのです。興りがそういうことだから芸術家はむろん主流で大勢入りましたが、科

学のほうで数名の人が委員に入りまして、どういうわけかその時分からほくもああいうことに関係させられるようになったのですが、その委員の仲間入りをして、いま覚えておられるのは中村清二先生、柴田桂太先生、今村明恒、ああいう人が入っていました。その議論たるやたいへんなものでした。芸術家と科学者が対立して。

しかし必ずしも両方はつきりと分かれて対抗したわけでもないのですが、長いことかかったのですよ。それでどうしても剥がさなければひびが入ったり何かして修理ができない。それでそれをどういふふうにして剥がすかということが問題になって、これはいくら議論してもつきないようなもので、結局柱ごと外すよりほかないとか、いろんな説があつたのですが、委員の中ではそういうことに一番知識があるというのはぼくだったので。それでよくにまかせて最善の方法をとる。その最善の方法をとるといわれても、皆さんの議論を聞いてみるとわけがわからなくなつてしまふが、それを途中で幾度も委員の方々に見てもらつたのです。そのときにこれはいけないということになりそうだったらそこでやめる。だからぼくは引き受けたといつても、外して入れ変えることを引き受けるのではなくて、まず外すということができるだけうまくして、どの程度にゆくかをやってみよう。そういうことであれと同じ土で同じような模型をつくつて、うまく塗れるかどうかをやってみることにして、ほくも忙しくて一人でとてもできないから、浜田（稔）君を連れて行って浜田君にやつてもらおう。その時分に中村博太郎君はまだそれほど、関係はあつたが浜田君が主任でやるようにして、それでようやくとれ

るといふことになりまして、浜田君はずいぶん骨を折ったんだけど、だからそれじゃとりにかかるが、とりにかからないうちにできるだけ模写のほうも進行しようということで、そっちの研究に入ったのですが、これがなかなかたいへんで、誰に頼んだらいいだろうということ、第一の議論の種になったのは上手でなくてはいかん、しかし上手な人には模写はできないというのですね。

村松 どうしても個性がでるわけですね。

内田 どうしても個性がでなければ絵はできるものではない。それをどのくらい自己を殺して模写に精進してくれるかどうかで、ずいぶん長いこと議論しましたよ。結局これは主として模写を取り扱う古賀君のような人が一番いいと、われわれそばで聞いてそう思いました。しかしそういう方面でなしに一流の絵描きさんの中で自己を殺しても模写をしていいということのみずから申し出たような人で、いまちようにやっている前田青邨とか安田鞠彦、あれが両大将でそれらの先生のお弟子さんたちで模写にとりかかったのです。遅くなっているので非常に急ぐので早くやれ、早くやれというのです。冬はああいうところは寒いのですが、やはり早くやらなければならぬということになるので、ともかく電気コタツを入れたのが失敗のもとです。ですから壁画保存のために壁画を滅ぼしたようなことになるのです。そこところが裁判になったりなどして、結局はつきりしないでいるから、われわれは勝手に批評をするというわけにはいかんが、ぼくはこう思うということだけにすぎないのですかね。

村松 そうすると壁画の保存事業というか、最初の委員会から先生はタッチされたわけですね。その壁画を浜田先生にお願いして壁を抜くのが実現したのは、火事のあとに実現したことになるのですね。

内田 あとでなおむずかしくなったわけですね。けどそういうのがあったからわりあいうまくいったのです。あんなのはもう少し早くわかっていけば、もう少し早くやって焼かないですんだかもしれない。

——何か樹脂を注射するとか、何かして固めるという……。

内田 樹脂のほうはあとでもないのですが、どっちかという樹脂のほう先といてもいいのかもしれない。これは応用化学の田中芳雄君が委員であって、それを推奨したのですが、芸術家のほうにはこれに反対の人が多かったのですね。絶対反対という人もあったのですが、それは前に京都大学の先生が、むこうは京都に近いものだから何とか保存する方法はないかというので樹脂の液を注射して非常によくできて、しかし五年ほどたったら色が変わったのです。だから科学者のいいというのはあてにならないのです。あんなことになるくらいなら、むしろ打ち壊したほうがいいという。ぼくは行つて見るとよくわからないのです。素人が見るとよくわからないのですが、専門家が見るとそういうのですね。だから薬を使うということとは非常に反対が多かったのです。それを田中芳雄君のはそういうことを承知の上でなお使おうというのです。それは前にやった時代と今われわれがやるうというのは時代が違うので、樹脂の性質も違

っている。その樹脂の性質が違えばそれに適応する処理の方法があるので、いまやろうというやり方によってゆけば、そういうことはない。断じて大丈夫、保証するということまで強く主張されたのですが、それでやりだしてからあとでそれが実際成功するかしないかということになったので、それが焼けたので、あれはほとんど消えて、線は残っているのですが。

その田中芳雄君の助手として仕事をやったのが桜井（高景）君です。それで田中君は本来はああいうことが専門でないものだから、樹脂の方面のことは桜井君にまかせたのです。なかには田中君の説を信頼してそれを応用しようというのが出てきて、一番早く成功したのは名古屋城だっと思うが、名古屋城の壁画か何かの傷みがありまして、それを直して、これはたいへんうまくいって、直してあったために地震だったか火事だったか何かの災害を免れてよかったということもあるのです。それから桜井君のところは非常に繁盛しまして、つまり個人でもいろいろ巻物の傷みとか、掛け物の傷みとかを何とかうまく直してくれと来るわけです。それをいろいろ直したりしていたのですが、それでだんだんと広がって、いまではかなり進歩しています。広く行われていると思うのです。

村松 関野（克）先生の研究所（東京国立文化財研究所）でかなりやられていますね。

内田 あそこに田中君の系統の人はいなくなったが、桜井君があとを継いでやっているのと、あそこはいまあとに残って一生懸命にやっているのは化学のほうの柴田雄次君が熱心にやってくれている

わけです。だいぶうまくもなるし、また研究を始めてずいぶん年月もたちますから、だんだんと上手にできるようになった。

話は別になりますが、あれはもっとひどく焼けたと思ったのですが、見ると焼けたといっても線は残っているのですね。こんなのは色だけの問題だと思ふのです。

村松 一部消防のホースの…。

内田 あれは部分だから仕方がない。だからぼくは焼けたのを保存してもと思つたが、いってみるとなるほどこれなら保存すべきだという気になりました。線はほとんど失われていないのですね。あれは何回も見ましたが、あれを入れる家をつくるのをぼくが担当するものですからね。

村松 やはり雲岡から法隆寺につながっていますからね。雲岡とこの間は、大同から先生がいらつしやったときはかなり時間がかかったわけですか。

内田 そう時間はかかりません。じきです。交通機関は何もないのです。大同で仏像をとまかく行ってみて、これはたいしたものだと思いますが、一番たいしたものだと思つたのは石炭ですね。これは実をたいしたものので、そっちのほうにも顔を出して新京の有力な会社であれをものにするのに、日本ではあの当時戦争の關係もあつて石炭がなくて困つた時分でもあつて、運送がたいへんだというのですね。ぼくはいろいろ計算して大同から天津まで鉄道線路を引いて天津から船に積む。しかしその距離が非常にあるので、天津まで来る間に貨車に積んだ石炭の四割何分かが燃料として消費してし

まうのです。そうしたら一体いろんな運賃など入れて日本に持って来ていくらになるだろうと勘定したのですが、それでもひきあうのですね。

ほくらはあまり詳しいことは知らないのですが、もう少しそれを深くやってゆきますと近所に石灰石も出るのですね。石灰石と石炭を組み合わせてビニールの原料になるもの、それを現地の近くでつくとえらい儲かるのですね。

村松 カーバイドですね。

内田 それでそれをやらないかということをはくは話をして、だいぶ乗り気になって、うまくゆけばやろうかといって、むこうに社員を派遣して実際を見たりなどしたのですが、もしそれができていればほくも金持ちになるとい話だったのです。(笑)

村松 先生がお気づきになったくらい石炭がたくさんというか、露天になっているのですか。

内田 ほくは、露天だからたいしたものだ、日本のように穴を掘って土の下でほじくり返しているのはまるで違うと思ったのですが、それを何とか日本で開発しようと計画したのです。開発を天津の北に何とか炭鉱というのがあります。そこを日本が経営したわけです、その工場長が大同に來まして調べたのです。その人とほくが行ったのと同じ時分に行き会いました、いろいろ話をしたのですが、いま自分のいる炭鉱が露天掘りで日本に持って來るといふと非常に儲かる……。

村松 何か変わった名前でしたね。

内田 自分のいる所がすばらしいものだ、などといってもここに來てみるとまるで比較にならないのです。ほんとうに地面の上に露出していて、そこから石炭をとるので採りほうだいで、行つてとつてくれれば誰にでもとらせるのです。

それでその石炭が、煙が少しはでるが、あまりでないのです。それで冬はオンドルでもつて暖房をするのですが、床の下にれんがを積んでオンドルをめぐらしてそれを適当なところで火をたくと、それが燃えて熱気が循環するわけです。ポーッと薄い煙がでますが、ちよつと石炭をたいているなどと思えないのです。

村松 ほんとうに良質なわけですね。

内田 それで大同からそこまで子供や奥さんたちが入れ物を持って毎朝早く石炭を掘りに來るのです。それをとつてきて自由に処置してかまわないことになっているのです。大同に近い山西省のほうにそういう所があるということでしたが、だから非常な豊庫ですね。国が広いからああいう所も自然とあるのですね。

——石仏があるところにそういう炭鉱があるわけでないのですね。

内田 違うのですが近いのです。それはいまの都市計画に多少関係があるのです。炭鉱都市をつくるということが一つと、それを組み合わせて生産財にする工業都市を一つつくる。

それからむこうの人は賭け事が好きなんです。競馬などという夢中になってしまふらしいのです。それでほくは競馬が好きならやらしたらいいじゃないかと大いに主張したのですが、やはり軍人方面の人はそんなものをやらせると風紀が悪くなつたりするといけ

ないから禁止すべきだということです。

ぼくは最後まで競馬を大いに推奨したのです。好きでやりたいというのならめいめい勝手に賭け事をして、競馬をやらせないから賭け事はやめになるというわけでないのだから、好きでやろうというのならやらしたらいじやないかという説ですが、それをむこうで採用したか、しないかは別として多くの案には大競馬場をつくったのです。だから大同のおもなる都市と大炭鉱都市、競馬場それから墓地、工業都市、これが集団的にぼつぼつかたまつてできる、そういうのを入れよう。これもやはり大同あたりに行つてのんびりかまえて行つて見たので、そういう考えもできたのだらうと思うのです。そういうのは少し先のほうの話をしたのですが、大同そのものは、もとある都市はそれを拡大する。日本でやっているような都市計画的に拡大するということではだめだから、それは捨ててしまつて、また新たに新都市をつくるという案でゆこうということにしたのですが、もとある都市を捨ててしまうのはもつたないという話で、やはりれんがなどの耐火都市ですからね。

村松 当時の大同は相当大きな街だったのですか。

内田 大きいですね。蒙古の中で……。

村松 二、三十万おつたのでしょうか。

内田 そうはいなかったでしょうね。その中心部はおいといて、その外側に新たなものを、従来の何倍かあるような都市をつくつて、そのまわりのところに大きな道だの、汽車だの、交通機関をおいて、そこに出て来て新しいほうはそこに入っていく大きな立派な道をつ

くつてゆく。そこにシナ風の住宅、および環境施設をつくる。従来あるよりもっと優れたもので、愉快に生活できるようなのにして、これは改造しないでもいいのです。従来あるのは立派なものだから、それはいくらかでも変えてゆく場合は前よりはよりいいものを作る。その外側は工場のようなものは工業都市にして分離してしましますから、工場でない事務的な仕事をするのが多いのですから。会社とか銀行とかそれに商店はむろんあるが、住宅が大部分ですね。その住宅にいい住宅地をつくりたいということから、空き地の割合などはむろんの話ですが、そのほかに住宅地が妨げられるというのは交通機関が非常に多いのです。工場などは同じところをおくから、はじめから離す考えでこつちがそれをつくるのを許さないが、交通機関が街の中を通り抜けるということが非常にいけないので、これは外国にもそういう議論があるが、やはりむずかしいとみえて、その励行ができなくて困っているところが多いようですが。南京かどつかの近くにそういう住宅地をつくつた例があるということを行く前に読んでみたことがありまして、原のようなどころにつくるのなら、ぜひ行き止まりの道、都市計画の道路計画といえは道は四通発達しなければならぬというのが原則になつてゐるのです。行き止まりの道は許可しない。日本でもそれを真似してなかなか許さないような場合が多い。

それもぼくはそうじゃないので商業地はそれでいいが、住宅地は行き止まりの道を盛んにつくる。だから住宅街区に入るといふと非常に損をする。ぐるぐる回つて結局もとの所に帰つてこなくては、

そこから出られない。そういう道をつくる。そうすれば自然と人が行かなくなるから自動車に妨げられることはない。東京でもそうしなければいけないのですが、なかなか道は交通の便のためにあると思っているから、交通の便がなくて何のための道だと言うが、道はそうでなくて交通もさることながら、交通に必要な道は住宅街区の外に設けるのであって、住宅地の中の普通の道はどこに行っても行き止まりになる。それでそこからぐるっと回って広場を通ってゆけば突き当たりになり、その広場を回って帰ってくる。これは東京の世田谷か、杉並に最近できておりますね。相当大きな団地ですよ。

村松 最近はおえて中途中半ばに通じているので、大通りが混むからタクシーなど住宅街の細い道を通りますね。

内田 あれは入ったら出られなくするのが一番です。もとに戻るより方法がないようにする。

村松 それを大同でやられたのですね。

内田 それは徹底的にやったのです。しかし交通が不便になっては困るから回つてもとに戻ってくるんだけど、少し離れたところとの交通は不便でないようにする。

——ブロックごとにするわけですね。

内田 それで単位は、これは世界的に議論の決まっているものだが、一番小さなグループは小学校単位です。今度は所によれば中学校になり、あるいはいきなり高等学校になるという単位、それをもう少し別なむきで分けると病院の単位、そういうので単位をこしら

えてその単位の研究をいろいろやってもらって、おもな違う点は一入あたりの宅地が非常にゆったりしていることと、行きどまり道をつくった。これはむこうでもいろいろ説明したときに議論がでまして、じゃこの道は不便でしょうがない、不便なようにするのだから不便でないと困ると言ったのですが。

村松 それは三人の方をお連れになつてむこうにいらつしやつて、現地をごらんになつてむこうで案をおつくりになつたのですか。

内田 こちらははつくつてゆかなかつたのですが、そういう小学校単位、大きな学校の単位、病院単位そういうのをやるうというの考えていたのです。それをただそういう土地に合うように具体化して、工場などは日本のように家庭工業のようなのが混ざつてくると困ると考えていたのです。それは大同のようなどころよりは？ほかの交通機関の関係で自由に行き来できるような場所でないとう工場をつくるのに不便ですから、それは自然と解決するようになったのです。たいへん楽になった。工場のほうは…。

村松 デザインそのものはこの間高山先生からお話しを伺つたのです。

——？

内田 いまはちよつと行くことは無理でしょうね。

村松 大同へは先生はどのくらい滞在されたのですか。

内田 約一ヵ月ですね。

——それ一回だけですか。

内田 またあとで来るつもりで、だいぶほうぼうぬがしてきたのですが、あれはだめですね。(テープ替え) 田辺平学さんが大津の出身でしたね。

村松 都市計画ですね。

内田 卒業計画です。ぼくと同じような経過をあの人はたどっていますね。

村松 大陸で先生が具体的に計画されたのは大同だけです。上海とかむこうのほうは御関係ないのですか。

内田 あれはほとんど決まっているなかをやったのです。なかをやるといっても、上海などは一邸宅にゴルフ場が一つできるぐらいの雄大なものですから、その中を調べたりしましたが、それはたいたいものでありません。

村松 上海もいらつしやることはいらつしやったのですか。

内田 上海は二度か、三度ぐらい行きました。珠江には二度行きました。

村松 高山先生などをお連れになつてですか。

内田 それは関係ありません。大同より上海のほうが先じやなかつたかな。

村松 ということは、都市計画は当時の大学の先生というか、建築家を含めて、あまり他にはやられる方はいらつしやらなかつたわけですか。

内田 都市計画はやるような人はいなくなつたですね。

村松 いわゆる専門家が育っていないのですね。

内田 いまは外国に家を建てるといふ人は盛んにありますが、ほくは上海の自然科学研究所をやつた場合は非常に少なかつたのです。それからニューヨークやサンフランシスコの博覧会などですね。

——？

内田 いまはそうでなくなつてきましたね。

村松 そうしますと先生が講義を始められて、大同などで実際に計画をお立てになつて、先生の都市計画の後継者は高山先生ということになりますか。

内田 高山君がぼくの考えていたことを、細部では違いますが、大綱においては同じようなものです。

村松 それから急に人は増えましたですね。

内田 いまはいつの間にか、たいしたものになりました。都市計画が独立したのは東京よりは京都のほうが先じやないのですか。京都はちつとも発展しないのです。

土木の先生で名前は忘れましたが、これは大同のというわけなのです。外国では大きい工場をつくらうという場合にはその工場に通う職工手で、全部含めた人を収容し、それらの人が生活に必要な環境をつくるという考えから都市を考える。そしてそれをいろいろ割り付ける。そういうことをむこうではやっているのに、日本ではそうでなくて、ものをつくるには工場をつくりさえすればいい。甚だしいのになると機械は仮小屋の中に入れていても、ものはいけるという。こんなのは非常にばかげた話ですが、ぼくは始終、

いい例だから話をするのですが、戦争時分に人がいるので金はいくらでも出すが、家などは考えちゃいない。勝手にしろ、女郎屋を宿屋にしてそこから通って来たということもある。そういう状態とまるで雲泥の違いです。その割合などはフォルクスワーゲンの都市のと非常に似ているのです。そんな格好にしたから面積はいくらかわらわってききましたが、だいたい同じ割合です。これも本工場と町工場の割合はこのくらいの程度がいいのです。

村松 フォルクスワーゲンと似ているのですね。いまでも京業工業地帯で一生涯懸命やっていますが、なかなかそうはゆきませぬ。ことに土地問題その他やかましいですからね。

八幡製鉄の君津工場ではアパートと同時ですね。いままでは工場の主建物ができて室内などができる時分に木造のバラック程度の借家が出ていたのですが、このころは高層のアパートが同時にできている。それだけ進んできたわけですね。しかし全体のレイアウトを八幡製鉄はどこまでやっているか。その点日立など大きな見通しをつけてやっておられますね。

村松 日立の話ができましたから内地に話を戻しまして、日立の工業都市の話などを少し。

内田 あれは深い記憶はないのですが、ぼくは日立の人で頻繁に話し合いをした人は高尾直三郎という、ぼくより二年あとに東大の電気を出た人ですが、あそこは初代の小平浪平さんが非常に偉い人で、世の中の人にはちつとも知らない。その名前を知らないところが偉いとして日立では得意になっていると思うのですが、つまりほ

かのことをちつともしないのです。日立に閉じこもっていて日立のことだけしかやらない。それに関連してくれば自然やるようになるが、そういうことで二代目がいまの高尾直三郎さん。三代目が馬場という人です。これが学者でもって前の小平さんや高尾さんと性格の違う人ですが、高尾さんの時代に非常な勢いでどんどん発展したのですが、日立の街に小さな煉瓦造りの修繕工場をつくったのが始まりで、山の上のほうに日立鋳業をつくって、その機械がこれらるのを修理するのに、ほんとうの街の中まで持って来る。東京まで持ってくるのはたいへんなことだから何か少しよつとした修理が間に合うようなものを現地につくるようにしたので、日立鋳業の修繕付属屋のようにしたものです。日立鋳業は金の製錬をするために建てたときには日本一の煙突を持っていた。

村松 その会社の技師のような形で鋳山の修理工場の主任というか、そういう資格で……

内田 資格はどうであったか知らないが、小平という人が相当長い間やっていて、小平さんの時分に工場長という名前はできていたのだろうが、ぼくらに高尾さんがよく言ったのは、ぼくが「なぜ日立のようなへんぴな所に工場をつくっているのか、どこか開いた具合のいい所に引越そうという気にならないのですか」という質問をしたときに、ぼくは相談を受けた時分に相当いろんなものができておりましたから、そう勝手気ままにあつちを壊したり、こつちを壊したりすることができない。新たな所につくれば思う存分のものできるから、その一つの理由は歴史ですね。

日立鉾山というのがそこにあって、その付属屋みたいなものにしてだんだん発達してきたということ、それとこれはぼくは実に意外で、聞いてみるとなるほどそうかなあと思ったのですが、人が得られるというのですね。非常に大きくなればまた別な方法を講じなければならぬが、その当時日立市を中心としてぼつぼつ大きくなっていくという程度のことならば、非常に便利だということですね。あその土地につくった工場に通って来る労働者は自分の家から自転車で通って来る。それが家の仕事もいくらかやるのだから遠くにいくことはできないが、近くの工場でそれを副業として働けるならば非常に便利だ。それでわりあい給料も安く人もよく集まる。だから一つの大きな理由になる。

その二つがおもな理由のようでした。あとのほうはぼくは全然気がつかなかったが、なるほど、そういうことがあるのかなと思っただけですが、ぼくの行ったときでも日立はまだ市にまでなっていないが、町の役員や議員さんなどのおもだった人は皆、日立の人でした。日立の町で日立ができていくということですね。

村松 九州の八幡みたいな感じですね。

内田 そのとき高尾さんは、工場の規模のことを調べると夢のようなことを言っているといって笑われるかもしれないが、ここから始まって東京まで行くのが理想だ。しかしそれを一度にやろうといつてもだめだから水戸まで行ってそこでゆうゆうと一休みして、それから東京まで行く。ずっと連続して日立の街にしよう、そういう説なんです。

それとぼくは一番感心したのは、この前お話しした病院で、東京の病院などに行っているということではとても安心して仕事はできない。むしろ東京で重病人がでたならば日立の病院に連れて来て、そこで治療してよくして帰す。そういう病院を日立に建てたい。ぼくはそれにはどうも敬服しましたですね。そんな気持ちだからこそ日立は発展したのでしようが、病院はわりあい最近にできたのですが、そのうちに多賀に高等学校があつて、それが専門学校になって、いまは大学になっていますが、ああいうふうにかたまりが実際少しかかるとどんどんできたのです。

その一つとして水戸に工場をつくりたいという話をして、水戸の地図を見たり実際行ってみたりして、ただ現在あるところを忠実によつと離れたところに、それで離れたところならどの辺がいいだろうかといろいろ考えて勝田がいいだろうという、そのへんまで高尾さんと相談したのですが、高尾さんも賛成だったが、それからだんだん戦争が激しくなってきたものだから、だいが様子も変わってきたが、初めの計画が製鉄工場を一つつくるということだったのです。それに精密機械工業の大きなものをつくりたい。製鉄都市、その都市というのはぼくがかつてにつけたが製鉄所をその通りにつくった。製鉄所のほうは鉄の使用量が年々増えてきて、とても現在のよくな状態ではたえられないからどうしても外国に輸出できるようにする必要もあるし、日本では鉾石をもつてきて、どんどんつくらなければならぬから、鉄の需要は相当進むから、その相当大きなも

の、少なくとも現在ある日本の製鉄所では一番大きいものをつくりたい。これはそれ自身で運用して十分収支がつぐなうもの、もう一つの精密工業のほうは日本につくる鉄を原料とした鋳業というもので、細かい精密工業が非常に得意だから、精密工業のしつかりとしたものをつくりたい。これはなかなか外国相手でもない大きな注文がポツとくるというわけにはゆかないが、いまは幸いいくさの関係でもって方々でみんな精密工業ことに機関銃とか鉄砲とかいろいろ細かいものがあるが、それでもってだんだん大きくなってゆけば、そのうちにはしつかりしたものができる。これはなかなかたいへんなんでこれは仕事をする人、労働者を何人ぐらい使うのかと聞きましたら、たしか両方で十万は越えるもののようにしたが、それならむろん都市を建設するということから一つやったらどうか、工場をだんだんつくって人が自転車を通って来るといっても、そういつまでも続くわけではなく限度があるから、そこにほんとうにいい環境をつくってそこで安心して仕事ができるようにする。その時分にフォルクスワーゲンのあれは計画を始めたころでしたかね。それでフォルクスワーゲンの話などをしてそういう都市をつくるころまでゆかないまでも。製鉄所のほうを考えてみても一番どこでも行き詰まって困っているのは、ポタ山ができてポタ山の処理で、それをよほど将来のことも考えて徹底的に処理しないとうまくいかないようになる。それが少し遠方でもとかく海の埋め立てをやるよりほか方法がないのだから、ポタ山をつくってまたあとで片づけるというばかげたことはだめなんで、遠大な計画をたててポタを捨てるた

びに工場の敷地がだんだんできてくる。というのが一番いいのじゃないかということ、そのへんからあとは多くの勝手な考えでやってしまつて、実際には図をつくつたのは(内田)祥文がつくつたのですが、あまりほかの世話のやり方もしなかったもので、その図面を見ればまた何か意見がでると思います。

村松 高山先生の…?

——プリントで調べましたがまだ小さいですね。あれが全部でないと思います。一遍市川さんに会つてこつち側でそういうものがあるかもしれないと言つておりましたね。

村松 しかしずいぶん気宇壮大な話ですね。日立というのはその時代から、例えば電機製品に限定しなくても企業は伸びていたのですね。

内田 ぼくは電機会社をつくったときに、いったい電球と電機とどういう関係があつて、どういうふう将来結びついてゆくのですかと聞いたのですが、そういうことよりいろんな種類のものに手を広げておかないとデフレーションが来たときに切り抜けなければならぬ。そういうことを言っていました。

建築というのはともかく面積が多い、またそれに従事する人たちが多いいけれども、これはいくら多くても余るといふことはないのです。日本の国が栄えるにしたがつて工場がだんだん、特に日本のように農業でもって立国してゆこうという昔の考えはだめです。どうしても工業立国という考えでゆかなければならない。だからぼくは日本の増えてくる人口を農業をやめさせて工業で養つてゆけますかと言

ったのですが、それはゆけると言っていましたね。非常な意気込みでした。あそこの特徴はいまでは特徴づけられるのは困るのかもしれないが、わき見をしないで自分のところだけでやるということですね。だからそのようにやっていた人がみんなあそこでは偉くなっております。

村松 技術的にも外国の技術導入を日立だけはほとんどやっていませんね。技術の独立を昔からやっています。

内田 それもぼくは聞いたことがあります、むしろむこうに技術を輸出したいと言っていますね。

—？

村松 日立の病院のお話しも伺って、そういうことでは天理なども一種の都市計画になるのじゃないんですか。

あれは奈良県関係の人がおもだったのですかね。

内田 高山君を推薦して高山君がある程度相談にのっているのじゃないんですか。しかしそう頻繁にはいっていませんね。

村松 そういうことでは戦後のこの前できた第一生命の大井町本社（昭和四三年、大井第一生命館）はかなり先生は顧問としてタッチされたのですが、見方によれば一種の都市計画ですね。

内田 しかしぼくと食い違いがありますので、あれは詳しく言うて悪口も言わなければならぬこともおこるが、しかししたいした着眼ですね。

—矢野（一郎）会長の先生のための原稿ができていますが、都市開発の権威者内田先生にお願いすると書いています。その前の

京橋の第一生命（大正十年、辰野・葛西事務所）の診断に先生が…。

内田 大正十二年の震災直後に多少傷んだけれども使えるだろうか、どうかということですが、大きな相談はあれを壊すべきか残すべきか、ぼくはできるならば残したほうがいいという意見を持っていて、それを矢野さんは賛成されたのです。ぼくらああいうところに引つ越すというのが、ほうぼうがだんだんやって、だんだん様子がわかってくればあとの人がついてくるということになるが、最初にやるのだからよほど都合のいい、そこに住むに愉快であり不都合のない環境をつくるということが必要で、その一番主なそろばんにのらないものは学校と病院です。学校は技術家でない人に言うのだから結果だけを言え方がいいが、ともかくあそこにある幼稚園に入り、小学校に入り、中学校に行き、高等学校に行けば東京の一流大学にそれほど困難なしに入れる。そういう学校をせひつくらなければならぬ。それができれば是非そうしたいが、つくらなければあいうへんびなところに初めての布石を打っていくことはできない。ただしそろばんにのせてやるといふと学校の経費と病院の経費、病院のほうはいくらか違う。学校の経費は会社の金を、そろばんをはじいて使うということではだめで、あなたもだいたいぶ金持ちのようだから、その金を吐き出して矢野一郎の道楽としてやるという気持ちがないと、ぼくはちよつとなかなか成功しないだろうと思うのです。

自分もアメリカに行つて見て様子などもわかっているから相当奮

発してやるつもりで、奮発というより趣味として、できあがるものを楽しみにしてやる。そういう学校ができたら非常に愉快なことじゃないですかと言ったのですが、それはむろんそろばんなしにやろう、病院のほうは生命保険だから専門で、立派な病院にゆくとすでに思っているのですから、案外どこかに穴があつて金の持ち出しもすらすらとできるのかもしれないが、ともかく立派な病院、日立の例なども話しましたが。

——？

内田 そうです。もう引越してゆかないことになりすから、もしどうも具合がどうかと思つたら、まず幹部職員が第一次着任させる。

——原稿をいただきに行つたときに幹部の奥さん方が？伊東さんにおまえ行けと言つておられましたか？

内田 やはり寄付を募集するとか、何とかではだめで、つまり矢野家の道楽としてやるという気持ちにならなければだめです。

村松 先生からそういう御託言を受けるとどうもしょうがないのですね。

内田 ほかの官庁との関係もありますし、街の関係があります。住宅を建てる場所なども、ぼくはあそこにはもつと広い場所があるから、そういういい場所に土地を買い家をつくつてそこに越してゆけるようにしたらいいだろうと思うのですが、なかなかむずかしいらしいですね。しかし交通関係とか何とかということに主力をおくものだから、それだと街を通るのが不便になる。そうでなくて、あ

あいうところを開発するのは環境の整備が本源ですから、環境がよくできてしまつてそれからあとの話にいろいろやる。

村松 先生が実際にタツチされた都市計画関係のことで大同と日立、いまの第一生命のお話しを伺つたのですが、あとおもだつたものはどういふものになりますか。終戦直後に新宿とか日比谷とかあれは祥文さんが……。

内田 あれは全然ぼくには関係ありません。

村松 六甲や大阪の住宅地の経営、そこらあたりのお話しをちょっと。

——高山先生が図を持っていましたか？

内田 あれは少し中途半端なもので、工業地であるのに工業地の住宅のものだけをやつたようなことになつて、工業地のほうはすでにできているのです。

住友工業のほうは、あれでぼくはあの時分は何とも思わなかつたし何ともまたなかつたが、いまはそういうことを思い出す人もないと思います。どういふふうにあそこに人を呼び寄せるかを研究したのでありますが、あそこにおりまして大阪市の助役でなかつたかと思うのですが、村上？という人、その人が住友に入つて大阪北港の管理、計画をやつていたのでありますが、その人といろいろ相談をしたわけですが。

村松 その方は前から先生とお知り合いですか。

内田 知らないのですが、それは今日もお話ししようと思つていたのでありますが、ついあと回しになつたのですが、都市計画をやつてい

た山県治郎という局長がおったのです。それが大阪の知事、神戸の知事などをやりまして、それがいた時分に自分のほうの土地にこういう人がいて、こういうことを計画しているから、何か相談相手ほしいというから相談にのってやらないかという話です。この村上というのは六甲のほうと間違っているかもしれないから調べてください。

村松 結局住友の経営になるわけですか。

内田 なぜ北港という名前になっているかというところ、大会社が三つか四つ一緒になってそれで大阪北港株式会社というものをつくったのです。土地が大阪の北にあたるのです。

——北でもないのですが、大阪の港の地域としたら北になるのです。
内田 人を呼び集めるのに何を狙っているかというところ釣り場を狙っているのです。釣りに人が集まって来るということがあって、それじゃ大勢人を集めるということがどうしても必要で、人が大勢くれば自然と土地は開けるのだから、それでほくは野球場をつくったらいいだろうというのです。その時分は甲子園の野球場ができていないときです。だからあの時分にそういう考えをだしたということは大膽なことで、むこうでも、あれは海の中に突き出したところになつてから風が強くてうまくいかんだろう。甲子園でもそういうことになつてからね。

——淀川の河口です。

村松 それで野球場を…。

内田 それがそこまでふん切りがあまり大きいものだからつかない

かった。まず敷地造成の意味で野球場をつくって、ほくは大学の復興計画などみなそういうふうにしてやったのだから、まず敷地を造成しておいて、それを運動場なり、何なりに使えばいい。もしその間に計画が変われば住宅にしてもよし、工業用地にしてもいいということにしたのですが、なかなかそういうわけにはいかなくて、工業地のほうを大いにやろうかということ、これはできているものだから、どうしても継ぎ足し、継ぎ足しということになって従来の建物との連絡がなかなか厄介でどうも思うようにゆかない。結局はうまくいかない。今度は住宅地というが、ほくらの考えているのは非常に広い面積を持った敷地ではどうしても一番利益があるのは住宅地ですから、そこで赤字を出すということはちよつと経営者としてやりいいことではない。それで住宅地のほんの一部を国庫の補助を得て住宅地に開発しようということになってそれだけができて、それでも相当なものです。

——大正の初めごろですがその先端の…。

内田 現在まだだめなんですかね。

——いまはもうかなり進んでいます、ただ非常に地盤の沈下で住宅地としても格好がつかないのです。

内田 それでもずいぶん行きましたよ。土曜日に朝三時間講義をしてそれから東京駅に駆けつけて汽車に乗ってむこうで泊まっただけで日曜の晩に大学にいきなり行って大学で講義をする。それが一年ぐらい続いたのです。

村松 その仕事ですか。

内田 その時分は気力も相当あったのです。

村松 六甲もそれと平行したのですね。

内田 それがすんでからあとにいまの山県君が兵庫県の知事だったか、大阪にいたときか…。

村松 ? 奥村という…。

内田 そうだ奥村千吉という人です。

内田 技術は田村君はほとんど関係ないと思うが多少意見は聞いたのです。あそこは別荘地ですから大阪から神戸のほう、六甲のほとんど全部を奥村という人が持っているようでしたね。金物屋さんだという話です。それでほしい一つが二〇〇坪ぐらいということだったかな（テープ替え）だれかに頼んで持っていることもきくのだが、ぼくは…？そしてむこうに幾日か住み込んでというほど長くはなかったが何日か行ってやってもらったが、そのときに庭が相当大事だからというので、庭のほうを田村剛君に頼めば一番安心だというので田村君に頼んだ。そしたらその登り口のところにはぼくと田村君の二人で設計したと書いています。

村松 やはり海が見えることがかなりきつい条件にされたというのほちよつと…。

内田 それが絶対条件です。それは野田（俊彦）君がずいぶん苦労しました。ここはどうにもしようがないというのは多少工作をして何かどこでも隅のところを？をつくってそこへ腰掛けでも置けば見えるという（笑）それでも見えないよりはいいだろうから見える

ようにしてほしいということでした。敷地割りは野田君のところですっかりできたはずですが、ぼくはできた敷地割りはみないのですね。

村松 「非芸術論」の野田俊彦さんですか、当時はこちらに野田さんはいらつしやったのですか。

内田 内務省をやめられたあとだったか、あるいは内務省にいた時分だったか、何しろ野田君はぼくが頼めばどんな無理なことでもやってくれる。

——渡辺要先生が何かお手伝いをされたらいいですね。渡辺さんが会合のときに申し出られました。

村松 それはかなり規模の大きい宅地開発ですか。

内田 全体をやるとすれば相当大きなものだが、やはり一部分をぼつぼつと売ったのじゃないのですかね。ぼくはいいところを売ってはだめだ、いいところはとっておいて一番悪いところを順々と売ってそしていくと、値が上がるようにしていったらいいと言ったのですがね。奥村君はそういう気持ちでしたね。しまいまで金持ちならばそういうふうに行っているだろうが、やはり商人だから、なかでどういふことがおきたか知りません。

村松 それから現地に先生はゆかれましたか。

内田 行ったことはありません。ぼくにせひ一つ買えと言っていたが、ぼくは行くことがないから買ってすぐ売っていいなら買うが、それは困るということです。先生が持っていたところを売ったとなると値打ちが下がるから困るということです。

村松 むこうの人とすればそうですね。

内田 専門家として売られるのは困るというのです。

——これも三菱地所の貴重品ですがコンペの写真です。

内田 二部は菱田唯蔵とか、いまの土岐（達人）君の奥さんのおやじですが、それが首席であったし、三部が宮地（重嗣）君、一つの部屋から三人同じ年に、同じ年といっても医学部は五年で法科は四年ですから、また工科は三年だった。はじめ三年ですんであと二年実習です。

——われわれのときは四年です。あとは助手とかの名前をもらっている。

内田 いまは助手とかの名前をもらうのはもつとずっと長くなるでしょう。われわれのときは法科が四年です。

村松 この機会に土岐さんに連絡をしておもなものは複写しておいたほうがいいかもしれませんね。

——ぼくは二部の人間と一番親しかったが、二部ではぼくと菱田ともう一人秦（逸三）というのがいました。

村松 あの当時はみんな写真館に行つて撮られるのですか。写真屋の出張もあるのでしょうか、まだ素人でカメラを持っておられるのはめずらしかったですね。

内田 持っていなかったですね。

村松 先生御自身はどうですか。

内田 ぼくは大学に入った年に買ってもらいましたよ。明治三十七年です。

村松 かなりお写しになったですか。

内田 そうですね機械も悪いし、写し方もへただからロクな写真はなかったが、ぼくは建築家はどうしてもどこかに行つていいところがあるとそれをすぐ写して保存しなければならぬから、どうしてもいるのだからと言つて買つてもらつたのですが。

——機械はもちろん輸入品でしょうね。

内田 国産じゃありません。

村松 あとまとまったお話しといえはどうかになるでしょうか。

内田 少し散在したことになりますが、例えば写真に関係したことでお話しをすることだが、工学部の二号館でれんがの色揃いなどをやめたとか、目地を無理にやかましくいうことをやめたとか…。

村松 大学の接収ですか、軍とアメリカ軍との接収、あのときの先生の御苦労話とかを断片的に伺つてはいるが、この機会に伺つておいてくれという御意見もあります。そういうこぼれ話とかか…。

内田 学士会の月報にぼくは二回続けて上と下とに出してあります。二段に分かれていまして、はじめの半分は日本の軍で使おうといつて日本の軍が接収に来たこと、それを徹底的に断つたのです。それで当時石井君というのが書記官だったが、そのとき書記官を立ち会わせてやったが、あとからよくもああいうのを断れたといつてほめられたが、むこうの人も大学を理解してくれたから、それで

んだのですが、何か文章に書いていると簡単でつまらんことのように

ですが、実際よくあれがまんしてくれて。ただ帰りがけに今日は使わしていただきたいといってお願いにあがったのですが、この次はお願いでなしに使わしてもらおうということになるかもしれないということ、だからぼくは最後に武力で接収するぶんにはわれわれは力がありませんからといって断ったのですが、陸軍の少将の人でした。最後は自分たちの死に場所をさがしているのだから、この大学の中を戦死の場所に使用してくれということです。あれはやはり東大というのが名声もあるし実力もあるし、心から知れていたというのが大きな理由だと思いますね。それを断つために接収されないですんだのです。あれはいかなる理由があるにせよ軍が使ったところは接収することです。

村松 考えようによれば、大学側からみれば大学の先生としたらこここそ自分たちの死に場所と思つたでしょうね。

内田 そのとおりぼくが言ったのですよ。

——きのう本郷に行つてみて時計台の上に赤旗を立てているでしょう。あれはどけてやりたい気がしましたね。

内田 なぜああいうところに赤旗を立てることを黙っているのかね。

村松 写真と一号館のこととか、大学の接収問題とか、まだお聞きすることはたくさんありますね。

(了)

○第十二回（内田先生訪問、六月五日午後二時。）

内田 上海の自然科学研究所ができ上がった時の写真は島岡君が写して、送ってくれた。まだ周囲の環境整備などできていないが、とにかくこういうのがあったわけですね。それからぼくの写っている写真などでもどういふのが適当かは委員会のほうで決めていただいたほうがいい。これは星野君が人の写したのは気にいらんといって、俺が写せばこう写せるといふわけだ。なかなか上手です。

村松 戦前からライカをお使いになつていますね。

内田 これはめずらしい写真です。ぼくは何から複写したのか覚えがないが、これを複写した元が元の工学部にあるはずですね。いまの少し感じが似ているでしょう。

村松 先生の写っている写真などで差し支えないのを出していただいて、編集委員会です。

内田 こういうものに写しておくものだという気がして、海上ビルディングの構造に関係した現場の人たちが一緒に写したのですが。

村松 高松さんというのは高松正夫さんですか。古橋さんというのはどういふ方ですか。やはり曾禰先生の事務所には。

内田 おつたのですかね。古橋竜太郎、やはり職員としていたのです。それから徳大寺彬麿、それは海上には関係ない人ですが。

村松 曾禰・中条事務所には戦前には錚々たる人がいますね。デザインをやる人の一番秀才のゆくとところだという感じですね。

内田 辰野・葛西事務所とか、曾禰・中条事務所とかね。

——このひげで中村先生を思い出しますね。

村松 塚本先生のひげもまた中国人のようなものですね。先生、それでこの間次回にお願いしようということになったのは、学士会月報の上下に大学接収のことが載っておられるわけですけど、やはり一応先生からお話しを伺っておいたほうが首尾一貫するんじゃないか……。

内田 その学士会月報は二冊あるんですが、そのうちの二冊、その原稿があるはずなんですが、その原稿が捜しても出てこないんです。ですからいまの接収のほうの正味のほうは、マッカーサー司令部との交渉などのことのほうは詳細を書いたものがありましたから、それはかなり長いんですけどいいですか。一応みんなお話しして、そのうちの中から適当なところを抜いていただいたら……。

村松 本そのものには抜くということを考えて、記録として先生のお話からのやつを補足しておきたいと思えますし、あと詳しい日時だとか、具体的な時日は拝見しましてデータとしたら押さええとくとして、むしろそれに載らないような先生のご感想のようなことを伺っておいたほうがよいと思えます。

内田 しかしやっぱり責任者になるといって、六六一号と、この前の六六〇号と、これは何か戦災後再稿した時のごく初めのほうの問題で、毎月出ているようなものでなくて、いまでも毎月は出ていないけれども、いまここに原稿がないんだけれども、これを接収を免れた直接の原因は、日本の軍が使わないことを認めてもらったということにあるんでして、それを認めてくれた日本の軍人さんも少

将の人でしたから、偉い人であったと思います。よくわれわれのいうことを了解して、その交渉の一番結末は、これはまだ戦争中で、戦争がもう大分危なくなってきた、そしていま言ってもちよつと想像もつかんようだけど、本郷の通りなど一丁目から三丁目あたりまでの間、ああいうところは往来の中に壕を掘りまして、そして、そういうところに戦線を引けるようなふうにならせた。だからもういよいよ本式だなあという気もしていたんですが、そのうちたびたび下級の将校といっても、大佐くらいを筆頭としての人たちがしばしば大学にこられて、大尉、中尉ぐらいの人が割合に頻繁に見えて、いろいろ大学の実際の状況などを調べて行った。これはぼくは直接会わないんで、ただそういう今日はこういうことがあった、昨日はこういうことがあったという話を聞いただけなんですけどね。

それからしばらくしてから将校の人が、大尉か中尉ぐらい、それも一人じゃなく二、三人を連れていたと思つたが、前にしばしば調べにきたような人なんだろうと思えますが、それで公式に総長を尋ねて見えたんです。それでいろいろ詳しく戦況などのことについても述べられたが、どうもこのいくさはとてもこういうふうになつてきたんでは立て直すということは大変なんで、われわれ軍に職を奉ずるものがみんな死ぬまで戦つて屍をさらすより方法がないと。ところで自分は、その人は皇居の最後の守りを命ぜられることになつたと。皇居を守るといっても、いきなりあそこにとじこもつてしまふんではまずい、一巻き、二巻き離れたところで死守するというふうに話しておりました。それで上野の森から本郷台にかけてのとこ

ろに戦陣を引くとなると、つまり二重に陣が可能だと、地形上も軍略上も非常にいいからぜひ使いたいということ、でその最後の場合になった時には、つまりどこで死ぬかという問題になるんだが、いま戦争する人間がそういうことをいうのは非常におかしいようだけれど、最後の場合まで話をしないといけないからというんだけれどもといって、できるだけ堅固なところにとどこもって少しでも長く、一分でも、二分でも長く抵抗をするということが最後の場合のわれわれの覚悟だと、でそこがすなわち死ぬ所になるんだと。それを死ぬ場所として、自分たち最後の守備に立つ人間の死ぬ場所としてこの大学を選んだんだと、それだから相談をしてくれ、そういうことなんです。

で何かそういうような正式な話がある場合に、途中こういった、ああいったという話がこじれるといけないものだから、向こうも立会人を連れてきて、こちらも、あとに事務局長という名前になったんだけれども、その当時は事務官だったか、石井君という人がずっと長く大学の学生課長をしていて、そしてそれが庶務課長になった。その石井庶務課長に立ち会って話をしてもらったんですが、つまり死ぬ場所を提供してほしいということといった言葉だの、顔色などがいかにも真剣で、これはもうどうにもしようがないといった。先生どう答えるだろうと思つてハラハラしていたというんですよ。でぼくはしかしもうあんまり考える気もない。ずっと前からもし大学が爆撃されることがあれば、ここで一緒に死ぬより仕方がないと覚悟は決まっていたから、だから別段スラッと、いやあなた方に占

領されては困るんだと、ここはもう古い時代から東京帝国大学の？ われわれこそここを死ぬ場所としていてるんであつて、事実それまでの間は一時も休まないでいろいろ事務も取るし、研究もする、そういうふうにしてやっているんだからどうもそういうふうには考えられません、とそういう返事をしたんです。そして、そうですかそれではわかりましたといって、いろいろ長く話をされましたが、最後に帰る時の挨拶は、今日は衷情を披瀝して場所を提供してほしいことをお願いしたけれども、ご容認がなかった。しかし、このままでは済まないの、場合によるとまた近いうちに使わしていただくように申し入れをするかもしれない。すいませんが今度はお願ひするんじやなくて、ぜひそういうふうにさせていたたくということ、伺うんですから、さよう、ご承知を願ひしますといっていました。

それでぼくはあとで考えてみるとよくああいう答弁ができたと思ふんですが、実力で占拠されるというなら、われわれ武力のないものは抵抗のしようがありませんから、どうぞご自由にというより仕方がありません。しかし決してそういうことは希望もしないし、どうかそうでないようお願いいたします。そういう返事をして別れたんですが、その後こないんですね。そのこないということは、ぼくはあとから考えてみてどういふわけだろうと思つてゐるんだが、やっぱりいろんな直接の理由はあるでしょうけれど、結局は東京帝国大学というもののウエイトですね。それと昔からどんなことをやっていると、いろいろな伝説の力が、軍人と大学の先生というのはその時分だつて仲が悪かつたもんなんです。われわれが説得するつもり

でいったんじゃなく、意見を述べただけだけど、なるほどそうでもあろうかと考えさせたということは、まったく東大の伝統の力と、先輩たちの功績がそういうふうになつたんだと、ほかの大学ではそういうふうゆかなかつたと思えますね。現にゆかなかつた例もあつた。でそういうことがあつてついに使わないですんだわけです。ぼくはすぐその日に臨時学部長会議を開いて、そしてその話をしたら、もうみんな覚悟をしましたね。これはすぐくるから秘密書類はどうしなくてはならんということなんかも。

村松 いまごろ大学の自治とか、何とかやかましくいわれていまして、やはり東京大学の自治というのがずい分累卵な危うきに立つたという、ずい分象徴的な話ですね。やつぱり軍に対する毅然たる態度というものが、こういうところに現れているようにお話しを伺って感じましたですね。

内田 別段何とも思つたんじゃないで、さつきもお話ししたように、あとから考えてみると奇態のようにスラスラと答弁が出てきたんですがね。

——いくら軍人でも大学の総長がここでわれわれも死ぬんだといわれたら、そこをわしらによこせとは、それは言い切れないでしょう。

村松 それと先生ご自分でキャンパスを作つてこられた、そういう根性みたいなものが昔から気持ちもそこにおありになつたから案外スラスラ出られて、そうでなくて考えて返答されるのはなかなかそうゆかなかつたんじゃないんですか。

——やつぱり先生が自信を持つて、本当にここで私も死ぬんだという覚悟で言われたから、軍人さんも圧倒されて…。

村松 しかし上野の森から本郷台の東京防衛の最後の防衛戦的な彰義隊時代の話みたいな感じですね。

内田 それは日本の軍に対する、最初はマッカーサー司令部が大学を占拠して、そこへ入ろうという計画がありまして、これは文部省を通じてだったか、あるいは何かそういうものの連絡をする会のようなものができていて、それを通じてであつたか、どちらだったか忘れましたが、東京へマッカーサー司令部が進んでくるという（テープ替え）下話のようなものがあつたんですかね、その筋のほうに。それでその当時のマッカーサー司令部と日本の政府との関係、文部省との関係などについては相当詳しい情報が東大にも入つておつたんですが、何とかしてこれは我慢してもらいたいものだというのが誰も意思で、でいろいろ免除してほしいということを頼んで、その頼む理由が東京帝国大学というものはご覧のように膨大な施設である。これがどこかへ代替施設を作つてそこへ越してゆくというようなことのできる柄のものではないんで。だからここが追いのけられて何かほかのものに使われるということになるならば、それはつまり東京帝国大学を一時廃校にするということよりほかに方法がない。

東京帝国大学は申すまでもなく日本における第一の学府である。でその運営を停止するということは日本の文化を停止することになる。文明国の最高文明国をもつて任じているアメリカがそういうこ

とをやることはいいことではないんでしょか、というところが一つ。それからもう一つのほうが、まあそれに続いてたが、その事柄が非常に重大なことで、決してそのうそ偽りを言ったり何かしていることでないことは、先に日本の軍から司令部の一部に使いたいから貸してくれと行ってこられた際も協力し得ないでお断りしたのであって、これが事実であることはご承知のとおりどこも軍事用には使っていない。ただし学問の研究は別で、これは軍の秘密というようなことで、総長といえども知っていない。しかし、いろいろな秘密もあるだろうから一般に公表すべきことではないし、非常に重要な研究をしている。あるいはいくさしつつも研究を続けて、その研究がものになるかも知れんというような状況のものなんだから、あなたのほうとしてはぶち壊すということがいいのかも知れないけども、教育施設なんだから、できるならどこか他のところを利用するということにしてほしいというような、簡単な言葉で。この学会のあれを少し長く書いてあるけれども、読んで下さるとその中にはもつといまのようなことが要領よく書いてあります。

でそういうことでマッカーサー司令部に交渉してもらったんです。でこれはそんなこといったっていくさなんだから、向こうは都合のいいようにするので、どうせ駄目だろうという説が多かったんです。それでもう文部省からも重要書類は焼き捨てるというような司令もありましたし、それから重大な書類はどこか疎開させろというようなこともあった。それは各部局なり、あるいは各教室なりがそれぞれ別なところに地を捜して、そこにものを隠すとか、ある

いは疎開するとかいうようなことをやるのは、決して本部としては妨げはしないけど、本部自身このところへ持って行ってしまいなさいというようなことは決して言いませんから、もし隠そうと思うならお隠しになっても差し支えないということを、各教室に本部からそう言っただけです。それだから大学としてはどこへ疎開するということは決めなかつた。ただあまり遠くないところの小学校のようなものがいいだろうというんで、千葉県で二、三の小学校を借りて、いざという時にはそこへどうしても固まっていなくてはならない人だけでもゆくといいようにすることに考えたりしてはいたんですが、それでこれはどうしても逃げ出さなければすまないのではなにかと思っていたところが、意外にもそういう、あとでわかつたんですが、やっぱり文化施設を占拠して壊してしまうというところはよくないというのがマッカーサーの考えであつたらしいです。

それで東京大学は接収しないということに決まりました、それで非常にありがたいと思つたんですが、それから数日後に大学の先生で外務省の最高顧問のようなことになっている先生が、ぼくその先生が外務省のほうといろいろ連絡してくれたんですが、ぼくのところへ電話が掛かつてきまして、また接収の話がありました、今度は非常に事柄がむずかしいようだから、もうあまりジタバタしないで適当なものほまとめてどうにかしたほうがいいだろうということ。外務省のほうの意見でもあるし、自分もそう思うからそういうふうな覚悟したらどうかということ、そして国として最高学府なんだから何とかして守ってもらうように話してもらえないだ

ろうか、重光大臣の友だちでしたからその人が。だからよく話ができるんでそう言ったところが、本来いうとちょっとそういうことをいうのもどうかと思われる、東京大学より以上に日本の国を挙げて接収を断りたいものがあるんだ、それだから常識的に考えてどうもそういうわけにはいかんよ。

これはあとから考えてみると、つまりもし断るなら、あれはいつも軍人の常でしょうか、代替物を持ってこいというんですね。代わりを持ってこいと。これは直接聞いたわけでないから正確にはどうかわからないけれども、皇后を占領しようということもあるいはにおわしたのではないかというような気もしました。その大学の先生がほくのところへ知らせてくれた意気込みなどの様子から察して。だけど大学は大学としてできるだけのことを骨を折っているんだが、ともかく大臣にだけ伝えてくれないかと言ったら、いやもうこれは大臣に伝えても駄目だと。それがこの前のはマッカーサー司令官がしろというんで、今度はそうじゃないんで、横浜に一時駐在している第八軍のアイケルバーガーの司令官がそういうふうに決めて、そしてもう東京に向かって進軍しつつあるんだ。その目当て地は東京大学と想像されるんで、これはもうちょっと議論したりしている余地はないんだと、こういう話でした。

それでどうもこれは文部大臣に断って直接談判する、ゆくとところまで行ってみるよりほかに仕方がないだろうと、これも簡単にほくの意見が決まったんですがね。非常に重大なことではなかなかさう決まりそうにないと思っただけけれども、割合簡単にさうし

ようということを決めまして、そうすればやっぱりマッカーサーに会いにゆくよりしようがない。会いにゆくといつてもほくはしゃべることはからつたでほとんど駄目だし、誰か意味を間違わないようにうまく伝えてくれるような人に一緒に行ってもらうより仕方がない。その時分でも大学にも婦人の通訳官がおりましたけども、どうもそういうのはあてにならないので、やはり芯のしっかりしている、こちらでいおうとしていることを十分了解して、伝えてくれるような人がほくと一緒に行ってもらうよりしようがない。自分で決めるより学部長に相談するのがいいだろうと思っただけから、すぐ南原（繁）君、南原君が法学部長でしたから南原君に電話を掛けて、こういうことになって、こういう行動を取ろうと思うんだが一緒に行ってもらう人を誰がいいだろう。適当な人を、この人が適当だと思ふ人が君がもしあるなら推薦してくれないかという話をしたら、南原君も一言にそれは高木（八尺）君がいいということをつたんですが、ほくもその高木君という人は、米國憲法の講座という、外國の憲法の講座が日本にあるというのはおかしいけど、アメリカ人の誰かが金を寄付して、それで高木君がその講座を担任している。で非常に語学の堪能な人で、日本語の演説というのはあまり上手でないんだけど、英語の演説というのは非常に上手で、その演説も聞いたことがあるんですが、それはほくも適当だと思う。あの人はしっかりしているし、考えのしっかりしていることではそのほうにも他に類のないような人だから、それじゃさうしようというんでさっそく高木君にきてもらいまして、これはやっぱりすぐきてくれ

ました。

それでその話をして、しかし順序としてともかく文部大臣に話をしなくてはいけない。幸いなことにその当時文部大臣は前田多門、これは前にもお話ししたかも知れないが、ほくより一年あとの人によく知っている人でしたから、そういうことも非常に都合がよかったです。で行ったところが閣議中でして、いま閣議中ですからといって玄関払いをくうところだったが、ちよつとでもいいから、重要な行動を取ろうと考えているんで大臣のご了解を得たいんですから、大学の内田がきたということを通じて下さいといって、そこまで言ったら仕方なく通じてくれたんです。そして前田君が総理官邸の玄関まで出てきまして、こういうふうなことでもうしょうがないから、最後の談判としてマッカーサーを尋ねてゆきたいと思うが、それはもうその当時でそれよりほかに方法はなからうという前田君の意見でしたから、いくらやってみても結果はうまくゆかないかも知れないけども、ともかくできるだけのこととはやってみたらよからうということ。それで自分はいま閣議中だからゆかれなければいけども、もしも必要であれば文部大臣から委任を受けて、文部大臣の代理としてもきたんだと、そういうふうにはマッカーサー司令部にも通じてくれてよろしいと。これはやっぱり大臣としては相当の決断だと思ふんですが、そして直接マッカーサーに会うということは、直接会うにしても誰かそれを取り次いでくれる人がなければ困るだろうということ。で幸いこれには名前が書いてあったと思いますが、高級副官の准将でしたか、それはマッカーサー司令部の事務をやつてい

る人だから、その人を紹介するから、その人を尋ねて行って、そして事情を話してマッカーサーに会わせてもらうなり、何なりしたらよからうと。自分は事柄をむずかしいからといって逃げるわけじゃないんだけれども、現在自分が行つてどうするとうわけにはゆかないから、だから文部大臣の代理といていいから君行つてやつてくれと、そういう話でして、文部大臣の許可を得たんだが、今度はそういう人を訪問するのにいきなり玄関へ行つてあれするのはどうだろうかという、やっぱり適当に面会の時日を打ち合わせておいて、そしてゆかなければ失礼に当たりやせんだろうかという高木君の話でしたが、それはほくは外国の事情を知らないから君ほどには感じないけれども、そりゃ誰でも相当な人に無理して会おうというんだから日を決めなければならぬのかも知れない。どうもこの際にはそうでなしに、いきなり押し掛けて行つて向こうの都合のつく時まで待つということ。ゆくり方法がなからうと思うんだが、そしてらえらい失礼にあつて、何かあの司令部には鉄砲を持った兵隊さんが立っているというから、追つ払われるだろうかという話もしたんだけれども、ま総長がそれだけの覚悟があるならゆきましようということ。いきなり行つたんです。

そうしたら非常に事柄の簡単なのに驚いたんですが、その高級副官ですね、准将の人がすぐ取り次いでくれて、それでゆきまして、自己紹介をして、あとは話をする。これは前にこういうような理由、さっきお話ししました理由で大学を接収するのはやめてほしいということ。マッカーサー將軍にお願いして、それを寛大にも入れて下

さったということを聞いて非常に喜んでいたところが、今度はまたアイケルバーガー将軍が同じようなことをいって、今度はもう進軍中だとかいうから、どうもそういうようなことをやられることは文明国の行動としてどうでしょうかというようなことを。やっぱり語学がああいう時はうまくなくちゃ駄目なんで、非常に穏やかな調子でスラスラとうまく、ほくはただ聞いていたんだけれども、やっぱり態度や何かですぐわかる。それで、接収しようとして進軍中だというようなことはあなた知っておられるのか、というような質問もしたようでしたけど、ある程度は知っているというような意味の返事でした。そしてしばらく考えていた。これはほくは初め実に意外なんで驚いたんですが、しばらくしたら電話機を取ってどこかへ電話を掛けたんです。そして少し待ってて、ちよつと時間が掛かったんだが、あとから話の様子を聞いてみるとそれがアイケルバーガー将軍に電話を掛けたんですね、その高級副官が。それでいうことは、あなたはマッカーサー元帥が東大を接収して、そしてそこをマッカーサー司令部に使用した計画が相当進んだのを、将軍の考えによってやめたという事実をご承知ですか、とこういう質問をしたんですね。ああ相手はアイケルバーガーだなという気がしたんですね。それに対してどういう返事があって、どうなったか知らないが、それからまたしばらく待ってたり、いろいろ時間が掛かりましたが、そして結局最後はもう向こうは準備完了して行動にまで移っているんだから、これをいまやめるといってもアイケルバーガー一人の考えでどうというわけにはゆかないらしい。相当向こうでも

協議をする必要があるらしいから、しばらく時間を貸してくれと。それにはできるだけこういう際のことだから早くやるから、きょうの四時ごろまで待ってみてくれないか。イエスカ、ノーかの返事はその時にするからということで、その高級副官の話でして、でどうもそういわれるからしょうがないから、それじゃ一応退散しよう。それが丁度昼すぎ、一時近くでした。それで四時までということでは、ほくは本郷へ帰って、いろいろのそういうことに対して事務もあるしするから、学部長会議もみんな集めているからそこで話もしなくてはならんし、それで本郷へ帰って、高木君はまずこのことを文部大臣に報告する必要がある。こういうことになっているということ。文部大臣に報告して、その他何か少しでも都合がよからうと思うようなところには連絡を取るということにして、たえず司令部とは連絡を取って四時まで自分はいるから、総長は部屋へ帰って待っていてくれ、そこへ返事をするからと、こういうことで、高木君はそこへ？いてくれたんです。

それで、その間の長かったことといったら大変なものでした。それでも向こうを尋ねたのは丁度十二時ごろで、だから食事の時間を向こうでは多少延ばしてくれていたんですね。それでほとんど四時でしたね。電話が掛かってきまして、そしてオーケー取ったというんで、高木君も非常に喜んで、ほくも非常に嬉しかったんだが、それでずい分そこに驚くべき事実、ほくは日本の事情を知っているからそれでおお驚くのかも知れないが、相手のつまり東大の総長が訪問して東大の接収をやめてくれといっているのを、それをすぐにそ

れを受けた本人が自分で電話を掛けて、相手の本人を呼び出して、そして交渉をして意見を聞いてもらうといったようなことは、とうてい日本では考えられないことですね。

村松 やっぱアメリカのいい面でしょうね。アメリカ的合理主義というか、非常にテキパキと…。

内田 非常に早いですね。とてもあんなこと日本ではできるものじゃない。

村松 その間先生は学部長を召集しておられたわけですね。

内田 そういう重大な事項が一時ちよっとすぎから四時まで、三時間くらいで解決するということは、とうてい日本の常識では考えられないことですよ。だからどうも考えてみたけれども駄目だと断られるだろうと思つて、そういうノーということを予想していたんだが、実に意外でしたね。

—その時の先生のお気持ちには？。

内田 あれが一晩持ち越したらまいっちゃいますね。

—そうですね。待ちくたびれると神経がまいってしまいますからね。

内田 それで高木君という人は実にぼくの代わりに行ってうまくやつて、あれは言葉使いや何かもいろいろ影響しますよ、ああいう交渉になると。それでそれが世の中にちつとも知られないでいるんですからね。だからぼくはこれはやっぱり何か適当に知らせておく必要があるというんで、ぼくはこの学士会月報にそれを書きまして、いまの高木君のことは相当詳しく書いてあります。それから南原君

に相談したというようなことも書いてあります。

—先生がそういうことをお考えになって、いい通訳が選ばれたというところが？になつたんでしょうね。

内田 何しろムチャクチャに直接ゆこうというふうにしたことはかえつてよかつたんですが、あとから考えてどうしてああいうことを決めたんだろうと思ひますがね。

村松 あんまり手続きをどうのこうのといつてはいるより、かえつてあいつた、相手が軍人ですからね。

内田 その間に二度ほど向こうの秘書のような人が部屋の中に入つてきまして、あとから考えるとそれはマッカーサーの使いであつたんだなあ。何か一緒に食事をする事になつていたらしく、時間があったから食事にゆこうということを催促してきたらしいんですね。それでぼくら二人も一応下へ下りようということでエレベーターのところへ行つたんです。そうしたらそこへ二人ばかり秘書を連れてマッカーサーがきまして、ぼくは敬意を払つてうしろへサツとよけたんです。そうしたら、よけなくてもいいから乗んなさいというんです。それから一緒に乗つて下へきたんですが、そういうようなことも実に簡単ですね。

村松 しかしこれは東京大学の百年史が数年先に作られるけれども、このお話しはそのためにも伺つておかなければいけないことですね。

内田 あなたもそのほうの責任者ですね。

村松 法学部では太田先生が出られますし、各学部から先生方が

出られます。これは百年ですから、明治百年が今年ですから、あと十年先ですけどね。明治十年の東京大学創立から何か数えるらしいですね。東京大学という名前になったのは十年ですね。帝国大学は改正があつて、大学？とかいろいろゴタゴタしていますね。

内田 東校なんていうのもありましたね。あれはいろんなのが一緒になつていて、まず医学部と、法学部と、文学部、理学部、これが一番先きなんです。だから基礎化学のほうの人は工学部なんていうのは学問じゃないといって、学問というのは理科と文科だけだ。詳しくいつたらそうかも知れませんね。ぼくは、工学部なんていうのは学問じゃないというから、法学部なんていうのは常識だ、学問じゃないといったんですが（笑）、それはけしからんと怒られたことがあつたけれども。医学部に、文学部に、もとをいえば医学部が一番古いんじゃないかな。

村松 お玉ヶ池の？か何かからか、それから文学部なんかはやはり昌平費でしたね。

内田 文学部、理学部、そして工学部のほうは明治十八年ですね。工部大学校というのが元の？。それから農学校これは高等農林学校といつていたのかな。農林学校というものがいまでもあるんですが、だからそれが名前を引き継いで残っているのかどうかそこをよく知りませんが。学園都市の問題と、それから第一高等学校と駒場の農学部との土地交換問題、これのことはいまままでお話ししてないから……。

村松 大学の接収関係のお話しを二応ここまででお伺いして、あ

とは学士会月報など拝見して参考にするとということで、いま先生がおっしゃられました学園都市のこととか、一高と農学部との土地交換の問題。あと先生先ほどおっしゃいましたね。いままでの話の中で落ちていると言われました。そのことはこういうことでございませうか。それとはまた別に、例えば……。

内田 たいていお話ししたことじゃないかと思うけど、ひよつとすると抜けていやしいかと思うようなことも……。

村松 じゃ学園都市のお話しから伺つてゆきましようか。それでもた思いつかれる。学園都市というのは先生どういふことなんでしょうか。

内田 それは大正十二年の大地震でもつて東京大学はひどくやられましたね。そのすぐあとで学園都市論というのが学内に起つてきたんです。これは東京大学ばかりでなしに蔵前の高等工業学校、それから一ツ橋の高等商業学校と、それから東京大学、この三つが東京では一番大きな問題であつたと思いますが、狭く苦しいところでコチヨコチヨやつているのはやめて、外国にある学園都市のようなものを少し離れたところへ作つて、それでそこで銘々先生も、学生も学問の修得や研究に性根傾け得るような施設を作るのがいいじゃないか。そういうものを作るにはこれが最上の機会じゃないか、だからぜひそういうふうにするとうと。そういう議論なんです、これはただいまのだけを聞くと誰でも賛成するんです。それで割合大きくファーッと広がつたのですが、いよいよ具体的に考えてみると、そのうちに一ツ橋だの、それから蔵前だののほうは現実に場所

がなくなっちゃっているものですから、それでどんどん進行していったんですが、東大のほうはそういうふうなわけにはゆかなかつた。

それでしばらく議論している間に大体二つ、つまり学園都市賛成説と、不賛成説とになってきたんですが、その賛成論というほうは、これは農学部が中心でしたね。でこれはさつきもちょっとお話ししましたが、農学部は本郷に越してこいということがその当時古在（由直）総長の宿願なんですね。これはまあいろいろぼくは理由を聞いてみたこともあるが、どうもはつきりしているところもあるし、していないところもあるんだけど、ほかの学部はともかくみんな目と鼻の先にあるのに、農学部だけが離れているんですね。駒場というようなところに。でこれがやっぱり総合大学の実を上げるのに具合が悪い。どうしてもすぐ目の先に一緒にあるということにしなければ農学部というものが大きくなれないという。そういうことを非常に強く主張されるんです。その古在先生が、古在先生は化学者だからああいうことを言ったのかも知れないが、それでぼくはちよつと納得できない。これは古在先生にもぼくは面と向かってそういったんですが、ほかの科はどうか知らんが、農学部の化学というのは非常に偉いんですよ。その年でも鈴木梅太郎さんの味の素とか、それからその跡取りの、いまはもう名誉教授になっていますが、やっぱりすばらしく繁盛する学科なんです、農芸化学は。それでいてどうしてそういうことを言うのかというようになことを質問したことがあるが。いやそうじゃないと、ただそういうだけでどうもはつき

り…。

村松 古在さんという方も農芸化学の先生ですか。

内田 そうです。これは実に農学部に対してはワンマンでしたね。

ほかの学部に対してはそうじゃなかったが。

村松 総合大学論者というんですか。

内田 ぼくもいろいろ理由を聞いてみたんだけど、やっぱり総合学部の実を上げるためには一つところに固まっているのが一番いい方法だということですね。そうでなければならぬというふうにはぼくは思わないが、一番いい方法だぐらいなら言えると思うが…。

村松 農芸化学の出身の総長としたら最初の方なんでしょうかね。

内田 最初らしい。農科出の人では一人ですね、古在さんが。

—丁度私たち学生の時は古在総長だったんです。かなり長くしておられたんですね。

内田 非常に長かったです。

—お姿いまだに思い出します。実に野武士のような、杖をついて、足が悪かったんですね…。

内田 野武士のような人でしたね。やっぱり年を取られてから少し衰えられましたけど。しかし…。

村松 それが結局先生のおっしゃってました当時の震災後の学園都市論と、古在先生の総合大学論というのは食い違ったような性格を持って…。

内田 農学部若い連中は一高の跡なんかへ越してきて、そして農学部縮まってあそこへ入ると、十八万坪あるんです。(テープ替え) 学園都市反対論者の一番強い主張をみると、つまり町の中でなければ駄目だと。私立大学の先生がなくなるとか、本学の先生で私立大学のいい学校へ行っている人たちが職を失うとか、みなそういうようなことが主であつて本当に学問を尊重するものから見れば実になつてない議論であつて、もし私に忌憚なく言わしてみれば、そういう教授は退めてもらったほうがいいんだと、そういうことを大きな委員会でも論じさせてもらいました。

結局どうも駄目になるんじゃないかと予想していたんだが、やっぱりああいうところは古在さんの政治力だと思ふんだが、?の様子をしていて何となしにいろいろ考えている。それで結局代々木にこういうことになつて、それは恐らく代々木にはゆけないということを予想しつつそう決めたんじゃないかと思いますが、代々木の程度なら、病院はそれでも承知しなかつたんですが、最後の場合には、どうしてもゆけと言われれば代々木なら仕方ないぐらいには考えていたかも知れないけれども、工学部などは代々木ぐらいなら、で代々木ということで、それじゃみんな代々木に一致して、代々木移転論ということにしようじゃないかということ。そうなるにあそこは陸軍の練兵場だからそこを譲り受けなければならぬ。それは申し込みと同時に一言に拒否された。でどうしても駄目だということになりまして、それで田園都市論をもっと強く述べておられた農学部の人たちも、それじゃゆくところがないならどうにもし

ようがないということに納得したんですが...

村松 先生さっきの学園都市論ですけど、代々木に一応意見としてまとまったわけですけど、それ以外の候補というのはいろいろ出たんですか。論議の過程で。ま最近ですと筑波とか、富士山とか言いますけど。

内田 それは富士山論なんかもないことはなかつたんですけど、しかしただそれはほんの思い付きに出たような意見で、代々木のよくな真面目な意見は出ませんでした。

村松 いまから見ますと遠いですから、あんまり遠いところは考えられなかつたと思いますね。

内田 蔵前や一ツ橋の越してゆく程度の広さのところではとても東大は入れない。だからあれを二つに分ける。三つに分けるという案は大分賛成でありました。

村松 やはり皆さん一緒にいたいということは共通してましたでしよ。

内田 そうなんですが、またそれと少し違った議論もありまして、それはまたすぐあとにお話ししますが、つまりそういうふうな駄目になつたんですね。駄目になつたから元のところで何とか復興しなければならぬ。それで本郷で復興するについてはいかにも場所が狭いからでき得る限り拡大しようと、それには費用がいるが、それは総長の手腕を信頼してできるだけだけ広くしてほしい。ほくらにも案を作つてみてくれということに案を作りましたが、それはまず第一には、いまはもうまったく大学の中になつちやうっているが、元の

前田公爵の住宅のあったところ、池のあるところ。知らないだろうな。

村松 どちらですか、赤門の…。

内田 赤門入って、三丁目のほうへ行ったところ。

村松 いまの学生会館の裏のあたりですか。

内田 学生会館よりも少し奥のほうですね。工学部なんかのほうも前田家のものだったんですね。それをその家の一部分をさいて、そこに東京大学できて、長いこと前田さんの家が残っていたんです。そこを明治天皇の行幸を仰ぐというのでレンガ造の立派な住宅を建てたんです。これは誰だったか、海軍の渡辺譲さん、そしてそこへずっと住んでおられたんですが、そこが震災でこわれたものだから、そこをどういふふうに入手するかというんでいろいろ案があり、研究したんですが、結局駒場の非常に広い場所の一部をさいて、そして交換しようと、そういうことで話がだんだん進んだ。

それから、一高の敷地と駒場の敷地のある部分とを交換しよう。その面積についてはいろいろ議論があつてなかなか決まらなかったんですが、結局話はある程度成立しました。これは土地だけならこんなことでは相場が違ふというようなことで、いろいろやかましく言ったんだけど、結局不足するような部分は施設を大学の金で作つて。あそこは昔から全寮制というのが昔からの理想である、全部の学生が寄宿舎に入る。それといろいろな建物をこういうのがほしい、ああいうのがほしいという注文があつただけど、そのうちの一番大きなのが立派な運動場を、いろんな種類のものを作つてく

れ、野球場と、テニスコートと、蹴球場と陸上と、その四つを作つてくれと、これもいろいろ交渉にも行つたんですが、文部省が第一高等学校というのは特別だということで、そういう施設をするとかの高等学校のほうにもいくらか潤いを付けなければ納まりがつかんということ、それでしようがないんで、結局古在さんがそういう時になると暴力を振るうような人で、つまり大学のものとして作つてそれをやつちまうというようなことも計画されました。運動場はとでも予算なんぞ出したつて取れるようなものでないんですね。それでこの前にもお話ししたとおり、敷地の整備ですね。駒場の土地なんというのはデコボコしている。それで低いところには水田もあつたんですからね、農場の。そういうのをみんな整備をして、そして運動場にすぐなるように？まで作っちゃった。そしてあとからごくわずかな予算を取つて、それでスタンドを作った。だから一高はどういうわけであんな運動場ができるんだらうということ、よくほうぼうから言われて、それでよくは案内して、これはデコボコして使って使い道にならなくてしょうがない。

村松 一高の学生などは大分騒ぎましたか。

内田 学生は非常に活躍したんですが、ぼくらは直接知つているのは岸道三という道路公団の総裁、あれは何というのかあいう特別な腕のある人間で、有能な男で偉くなるだらうとは思つていたんだが、農科を出てじきに近衛さんの秘書官になった。近衛さんと一高の同級なんですよ。それでばかに仲が良くて、古在さんのところへなどよく談判にきて、一高は校長と談判するより岸と話をしたほ

うがわかりがよくていいと言っていました(笑)、ぼくらが費用から生み出してという、この前お話しした工学部のものと同じようなふうに、やっぱりほかのほうをいろいろ節約して、寄宿舎をみんな地下道でつないで、その地下道で図書館と、それから集会室が、本館がこういうふうにあります、その前のところに図書館と集会室があつて、寄宿舎がこつちにある。その寄宿舎を地下道でズーツとつないで、その端のほうからこつちへ行つて図書館と集会室に。集会室といつても大講堂ですね。大講堂には雨が降つていても傘なしでもつてゆけるように、これはなかなか大きな工事でした。そういうものがでかすという計画を立てて、半分ぐらいできたところで先生なんぞ見たら、先生なんぞは全然不満がなかつたです。非常に喜んでいました。

村松 結局先生の独断でやつちやたような…。

内田 よそさんに影響をおよぼすようなことはあまりやりませんでしたね。

村松 営繕一本といえますか、営繕統一というような。それに対して特殊な立場を主張された。それと学園都市論というのは、結局それで代々木は断られて自然消滅したような感じで、その一高と農学部との交換というのは、結局その仕上げのような性格を持ったわけですか、一種の総合大学論に対する。時間的にはあとなことになるわけですか。

内田 ずっとあとになりますね。その交換からんでいろいろなことが行われたですね。悪いことじゃないですけど、従来でくべき

してできなくていたようなものがいろいろ。それからテニス場、あれは六年ぐらいにできたんだっただ、いまはもうほかのものにあげてしまつて。丁度先生たちや学生たちの注文も、つまり東大の予科みたいなものなんだから、あそこに入つたら東大に入つたも同じような気分になるものがほしいということで、それで形なども同じようなものを…。

それからあそこに高等農林学校というのがあつた。それから駒場の実科というのがありまして、そういうのがいろいろと整理されたようですが、これはぼくが取り扱つた建物の中に入っているものもあるし、ほんの一部しか入っていないものもあるものだから、あまり詳しくは知りませんが、それが一高のが一番大きい。それから、前田さんのところはさつきお話ししましたね。それからこれはごく小さいものだけど、堀田邸というのを全部、これは交換だつたかな。一高の現在教養学部の一番上寄りのところの敷地がそうなんです。これは面積があまり広いものでありませんが、一高の敷地というのは元は水戸の別邸だつたんですね。これは狭いんですが、それでも数千坪はありましたかね。

村松 やはり堀田さんというのは佐倉の殿様か何かでしたね。

内田 そうですね。それから少しあとになってから、だんだん欲を出して、とうとう？にしたのは浅野邸ですね。

村松 どのあたりですか。

内田 広島の浅野…。

——原子力関係の…。

村松 原子力施設なんて？。

内田 工学部もずい分あの中に入ったんですよ。

村松 伊東忠太さんの設計のあれですか。和風だか何か…。

内田 あれは違います。

村松 あれは浅野総一郎のほうですね。なるほど今度の大型計算機センターや何かあるところですね。これはもう先生の時から東大のものになっていたんですか。

内田 そうです。それが所属が決まっていけないものですから、所属がだんだんと決まってゆくうちにはつきりしてくるんです。

村松 古くからそうなっていたんですね。

内田 古くからといっても、やっぱり終戦より前の時分からでしょうね。

村松 先生おやりになったわけですか。

内田 そうじゃありません、これは。土地の交換や何かのことはやりましたけど、家を建てるのは、これは…。

村松 土地を収められたのは？。

内田 これをぼくはぜひ欲しいと思ったりしたんだが、これを見ると何だかまるで混乱しちゃっているんですね。これじゃどうもぼくがせっかくなか一生懸命に整然たるものを作ったつもりなのに、そうならないから、これはやめようと思うんだ。

——特に先生のご関係のあったやつだけ黒く塗りつぶしたりして、先生が…。

村松 あるいは薄くしちゃってもいいですよ。先生のあとから

の分を。

内田 そういうふうに作ってもらおうというと、またそのあとこれを書かなくちゃなりませんからね。

村松 その程度のことでしたらあんまり手間の掛かるものじゃないですから。しかしまだ先生の面影がずい分ございますよ、主なものは。

——まだまだございますよ。

内田 これは…。

村松 伝染病研究所ですか。

内田 これの中ではこれが一番先にできたんですよ。これはぼくが行って見て、これはジフテリアのワクチンを取る馬をここで飼っているんです。

村松 厩舎みたいですね。

内田 そうです。厩舎がずっとありまして、そこで血を絞るんですね。それが実に不衛生な、普通の馬小屋でしているんです。でこんなことでもいいのかとってお医者さんに聞くと、いやそれはいけないんだけど、少しでもよくしようと思ってもなかなかそういうふうにしてくれないからというんで、それじゃぼくに任しておけというって、それでぼくが引き受けて、鉄筋コンクリートで世界一の厩だと言われた。

村松 六棟作ったんですか。

内田 いや五つ、これが？をした？で、これは何か馬草か何か入れて、そしてこれがいくつにも分けておいといたのを長与（又郎）

さんが一緒にしてくれということ、一緒にした。それから、これが公衆衛生院、公衆衛生院を建てる時につまり場所がないという点もあつたんだが、この土地を使わしてほしい。その理由は、この家とこの家と両方合わして予防医学に関する総合研究機関にする、それにはすぐそばがいいと、こっちは谷あいみたいなところなんです。それでこれは八階ぐらいだったか、ぼくのやつた家ではいまのところ一番背が高い。

村松 これは先生どうい理由でこういう形になつたんですか。真つ直ぐとか、直角でなく、やはり地形…。

内田 地形が主です。ここところは丁度谷に接して、これからずっと低くなるわけです。前に少し前庭があつて。

村松 ずい分しかし思い切つた形ですね。プランの形も。

内田 そうです。変わつてますね。こういう？前にお話したようにこれがそうだし、日立の製作所、それから上海の自然科学研究所、みんなやつぱり初め離す計画でいたのが一緒になつちやつた。だからこれは直接ぼくがいろいろ図を書いたり何かしたやつですね。

村松 これは宇宙航研ですか。航空研究所、向こうのこういうところが先生のタツチされた…。

内田 いやそうではありません。こつちのほうは清水（幸重）君に任して好きなようにやつてくれといつて、清水君が岸田君に頼んだらしくて、岸田君の案で、ぼくはほとんど関係ありません。それからもう一つ、小石川の分院が、これは伊予田貢君に任してやつたん

です。それからあとは、まだ結局前田さんのところなどはこつちで予定したのが少し足らなくて、それで代々木の演習林というのを農学部が持つていて、これも古在さんがじゃあれ？というわけで、これも数千坪のものでしたかね。

村松 先生、大分お話しをお伺いして、で最初に先生いままでの、そのメモですか。

内田 これも搜して出てきたからここへ出しておいたが、この中にも、これは上海の自然科学研究所…。

村松 なかなか堂々たるものですね。先生こういう先生のデザインというの、外国の建築家を特にこいつが好きだというふうな、そういうことはございませんか。

内田 そういうことはありませんでした。ぼくが図をやり出した時分のはみな向こうのは非常に新しいんでして、ぼくが好まないようなのが多かつた。

村松 むしろ大正の半ばぐらいの卒業の方あたりくらいからですか、表現派がいいとか、グロビエウスが何とかということになつてきますけど。なかなかそれが日がさしてきれいですね陰が。

内田 これはこれよりほかにもうないんです。？君のはどこかへ行つちやつた。

——星野（昌一）先生が新田先生のネオゴシックを川添さんに近代的な感覚で撮つてもらつたといつて、このサンプルを自分で写された。

村松 今度はまた星野先生もかなりお好きなことができますし

よう。

内田 そうですね。

村松 やはり火事のことか…。

内田 あの人は何でもやるんだから。

村松 これは先生きよう用意されていたんですけど、いままでのお話の中で何か落とされたようなこと、講堂のお話しですか。

内田 これは大講堂の中で、安田善次郎さんが一〇〇万円寄付したということ、村上専精という人が初代安田善次郎さんの信者らしいんですね。この人は大学の教授ですけど、坊さんです。それその目的は、安田善次郎さんと話をしていて途中で、大学では一体始終卒業式には行幸があるようだが、行幸があるかどうかというところを使うんですか、という質問があつたんです。それで実はどっかやるようなところがあればいいんだが、そういうところがないものだから、普段講堂に使っているところを使うんだ。はなはだ不十分だ。何だかんだという話から、それじゃあんまりもつたないから私が寄付しようということであつたんです。それが話のはじまりだつたんです。それだけでもこれは決めてまだ着手していくらも経たないうちに刺客におそわれて殺されちゃつたんですね。

村松 安田善次郎さん…。

内田 初代善次郎さんです。それがやっぱり後藤新平さんなどがしきりに、あの人は市政調査会の建物をもちつたんですが、これはやっぱり安田善次郎さんという人はそういうことをいろいろ考える人であつたから、つまり後藤さんに市政に関するいろいろ基礎的な

調査をやってもらいたい。しかしそれには費用がいるから何か財源がなくちゃ、ただ金で持っていたんじゃすぐなくなってしまうから、何か毎年上がってくるようなものを寄付したいというんで、それであの建物を作って、そしてあの建物の家賃を調査事業費に使つて…。

村松 あそこはかなりいい図書がございますね。

内田 図書はずい分買いましたね。

村松 安田講堂はずい分行幸の時に竣工後ずっと使われたわけですか。

内田 いや案外使っていないですね。まあ行幸のある場合は使われたようだけど、行幸のある機会が少なかったな。

村松 行幸というと毎年じゃなかったんですか。卒業式…。

内田 われわれの自分には毎年だつたんですが、あんたの時分にはなかった。

——全然そういうことはなかった。それから天皇陛下を迎えるということは大学中全然なかった。また復興もできてなかった。しかし大講堂はありましたけどね。

内田 大講堂ができたやつたら丁度卒業式をやらないうような年が続くようになつちやつた。

村松 卒業式がない年があつたんですか。

内田 卒業式はあつたんですね。陛下をお迎えする…。

——大講堂は本当に？。

内田 震災前の設計であるためにこれを大体が鉄筋コンクリート

で作ってあった。それをあの大地震を経験してもう少し丈夫なものにしたらよからうということで、大学のほうのいろいろな建物の強さの基準が昔震災前に設計していたのとは様子が変わって、大分丈夫なものになった。だからこの家もそれにつり合うような丈夫なものにしたらどうかということも村上さんだの、ぼくらで考えまして、それでそういうことを一応言ってみたほうがいいだろうということでも、言いに行っただけです。ただそれを金を増やしてもらおうというふうな意味でなしに、こういうことになっているんだが前の計画どおりにつくってよろしいかということも聞きに行っただけです。そしてたらその時分は結城豊太郎さんが安田家の総番頭をされていて、結城さんが総て取り仕切ってそういうふうに決めておられたんですが、そうしたら元のとおりでよろしいということであつたものですが、それから新たに費用を掛けることをやめまして、ただ地震のためにやっぱり多少火事が起こったりして資材がやられたんで、その補充の意味で二割くらいだったかはつきり覚えていないですけど多少出して、そして増やしてやったけども、しかしそれは損害の補給だけで、新たに増やしたんではないということです。

それからこれは重要なことですが、あの家を作るについての注文は、あれは本部所管のものになるんで本部としての注文は、いろいろ評議会や何かで古在総長が相談されたわけなんです、前に使っていた大きな講堂というのは何と八番、三十八番だったか、いまの大講堂に向かつてすぐ左側の角のところ？、それで、それが音が非常に具合が悪い。で音をぜひいいものにしてくれよということ

で、それは劇場だとか、大集会場などには音が重大な要素だということとはわかりきっていることだから、それをできるだけよくつくらなければいけないということは当然なんだけれども、その当時まだ音のほうの研究が世界的に十分にできていない時で、それで丁度これに掛かった時分にアメリカで音の非常に具合の悪いものを整備するということ、そういう方法が行われるようになって、でそれを学問的に煎じ詰めてみるといふと余響、余る響き、リバーベレーション、リバーベレーション・ペリオド、それを音の種類によって変える必要があるということにして、ぼくはどうもあいまいなものならできるだけ野外で話をすると同じように音は止めないほうがいい、そのほうが安全だということではないかも知れないが安全だということ考えを持っていたんです。そのリバーベレーションのペリオドを直してゆくということ、やっぱりつまり野外に近いようなものになるものも相当あつたんです。ただそこで非常に不思議というよりはちょっと普通とちがうことは、これもアメリカでもって行われたこととですけど、針金を部屋の中へ張ってそして音を吸収させる。そうするとそれによってリバーベレーションのタイムが非常に短くなる。それでそういう整備の方法が用いられたということがありまして、これはどうもぼくらにもよくわからないものだから、それで理科の中村せいじ先生にお願いして、そしてそのことをどういうものだろうと聞いて質したら、まだ前例があまりないからはっきりしたことはわからないけども、いいことはあるだろうけど、悪いことは少ないだろうと思うと、だからこういう実用的なものにはやってみ

たらということ、それで岸田君に頼んで、蜘蛛の巣のような？をこしらえて、そしてやったんです。

村松 建築音響学の一番初期のお話しですね。

内田 それでできたら案外成績がよくて、非常に得をしたんだけれど、だから何も確信を持ってやったわけじゃない。(テープ替え)

——先生はもう最近ではカメラを扱われませんか。

内田 ええ、もう目が悪くて…。

村松 この間もちよっとカメラの話が出ましたけど、先生は古いカメラマンだそうですね。

内田 いや何でも古いんですよ。

村松 やはりそういう時代はご自分で暗室作業も全部やられるわけですか。

内田 ええ、こういう家ならあれだけでも、もつとひどい狭い木造の家のはしご段の下のとこに暗室を作って、そこでやったり。旅行はしながら、現像はしながら調査をして歩いたものなんです。秋田の地震だの、鹿児島島の地震などのフィルムはそういうふうにして…。

村松 現像しながらというのは旅行先で…。

内田 ええ旅行先で。

村松 それはやっぱり宿屋で電球を消してやるのですね。それぞれの時代に便利なものがありましたからね。写真はやはり建築の先生のご研究にずい分お役に立っているわけですか。

内田 そうですね。

村松 教材なんかにもやはりお使いになりましたですか。ご自分の写真を。

内田 ええ、あなた方はご承知ないかも知れないけど、ぼくの講義にはプリントが非常に多いんです。あれは自分で写したものが相当数あります。

村松 印刷に使うような写真を作るといことはなかなか大変なことですな。

——昔は？相当旅行される時重い？。

内田 重いです。それだからあの箱をかつぐ人夫を頼みまして、それじゃなくちゃとても…。

村松 しかし昔の大学の先生の月給ですと人夫と頼みましたでしょうけど、いまの大学の先生がそういうことをしたら、こっちが人夫になってしまいますよ。

内田 それはしかし出張ですから、旅費をもらうんですから。

村松 いや先生その旅費も違いますね。いまの私たちの旅費ですと年間三万円ないですよ。そうすると学会に一度若いのを一人か、二人連れてまいりますと一年分が一度の学会で終わりますね。だからやっぱり写真機をかつぐ人夫なんていうものの日当はなかなか…。先生どういふふうにしましょうか。

——もう一回ぐらいます…。

内田 まだずい分ありますね。上海の自然科学研究所、それから公衆衛生院、日立の小平記念館、済南の領事館、ニューヨークとサ

ンフランシスコの？

村松 万国博の日本館ですね。濟南の領事館のお話しは一応お伺いしておりますので、公衆衛生院とか小平記念館、それから万博の、天理のやつもお伺いしたような、しないような断片的な形ですね。

内田 東方文化学院東京研究所の配置図が出てきましたから、きょうお目になかなかつたかしら。

——写真など出てきたというお話しは何이었습니다。

村松 今度はじゃいままでまとめて伺わなかった建築関係を主に
…。

(了)

(校訂 中野実・谷本宗生・藤井恵介・角田真弓)